

## 32. 統合新領域学府

I	統合新領域学府の教育目的と特徴	32-2
II	「教育の水準」の分析・判定	32-4
	分析項目 I 教育活動の状況	32-4
	分析項目 II 教育成果の状況	32-30
III	「質の向上度」の分析	32-46

## I 統合新領域学府の教育目的と特徴

### 1. 本学府の教育目的は以下の通りである。

学問の細分化によって膨大な知が生み出されているが、従来の縦割りの個々の学問だけでは、現在の科学や社会が抱える複合的で根源的な課題を解決することは困難である。本学府では、科学的な知を再編成してこれらの課題に取り組み、その知的成果を社会に還元するとともに、自らそのような知の担い手として活躍する高度な専門人材を組織的に養成することを目的とする。

このような人材養成のためには、

#### 多様な学問分野の知の教授

学生が専門とする分野だけでなく、複合的な課題の解決に取り組むための基礎となる、関連する分野の知の教授

#### 課題解決に取り組む実践的教育

課題の把握とその解決に向けた取組を実践する演習による教育

が必要であり、そのような教育を行うことが本学府の特徴である。本学府は、ユーザー感性学専攻、オートモーティブサイエンス専攻、ライブラリーサイエンス専攻の3専攻から成る。各専攻の教育目的は、本学府の教育目的をそれぞれが取り扱う課題に応じて具体化したもので、以下のとおりである。

#### (ユーザー感性学専攻)

外界の事象(人・もの・こと・場)に対する感受性及び感受性に基づく統合的な心の働きである「感性」の研究教育を通じ、さまざまな知をユーザーの感性と融合させ、ユーザーの視点に立った人間理解をふまえた上で個人と社会の満足を創造できる新しい高度専門人材を育成する。なお、本専攻における「ユーザー」とは、自然、社会、人文科学や技術の知を使い役立てる個人、グループ、組織などを指す。

#### (オートモーティブサイエンス専攻)

オートモーティブという視点から自動車と先端技術、自動車と人間や社会、自動車と環境・エネルギーなどの先端的で複合的な課題を、工学から社会科学にまたがる知の統合によって解明し、新しいオートモーティブ社会を創造する高度な人材を養成する。

#### (ライブラリーサイエンス専攻)

ICT環境の発展と法令や流通の変化、国際化の進展に伴って、情報の管理・提供に関する様々な課題が生じている。これらの課題を、図書館情報学、アーカイブズ学、情報科学、情報法制、学習科学などの知の統合によって解決し、ユーザーの視点に立った情報の管理・提供によりユーザーの知の創造・継承活動を支援する人材、さらに、これからの情報の管理・提供のあり方を探求する人材を養成する。

### 2. 本学府の組織の特徴は、本学府の教育の特徴である多様な学問分野の知の教授と課題解決に取り組む実践的教育のため、学内の多くの研究院等の様々な専門性を持つ教員や実務経験を有する教員を多数配置するとともに、3専攻それぞれが、対象とする課題に応じて、企業、行政機関、地域社会、及び学内組織との連携体制を整えていることである。また、入学者の特徴は、多様な入学者選抜方法を実施し、多様な専門性を有する学生を受け入れていることである。

以上の教育目的と特徴は、本学の中期目標記載の基本的な目標「教育においては、確かな学問体系に立脚し、学際的な新たな学問領域を重視しながら、豊かな教養と人間性を備

え、世界的視野を持って生涯にわたり高い水準で能動的に学び続ける指導的人材を育成する。」を踏まえている。

[想定する関係者とその期待]

本学府においては、留学生や社会人を含めた在校生・受験生及びその家族、自治体、関連団体、関連企業、地域社会、国際社会から、「ユーザー感性学」、「オートモーティブサイエンス」及び「ライブラリーサイエンス」に関する高度な専門的知識と技能を身に付けた人材を育成することが期待されている。

## II 「教育の水準」の分析・判定

## 分析項目 I 教育活動の状況

## 観点 1-1 教育実施体制

(観点に係る状況)

## 1-1-1 (1) 組織編成上の工夫

## 1-1-1 (1) -① 教員組織編成や教育体制の工夫とその効果

## 1) 教育プログラムの実施体制

本学府の教育の特徴である多様な学問分野の知の教授のため、学内の多くの研究院等から様々な専門性を持つ教員を専任教員または兼任教員として本学府に配置している（資料 1、2）。

## ○資料 1 各専攻の責任部局

専攻	課程	責任部局
ユーザー感性学専攻	修士	人間環境学研究院、医学研究院、工学研究院、芸術工学研究院、システム情報科学研究院、農学研究院、総合研究博物館
	博士	
オートモーティブサイエンス専攻	修士	経済学研究院、工学研究院、システム情報科学研究院、先端物質化学研究所、稲盛フロンティア研究センター、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所
	博士	
ライブラリーサイエンス専攻	修士	人文科学研究院、比較社会文化研究院、法学研究院、医学研究院、システム情報科学研究院、附属図書館、附属図書館付設記録資料館、情報基盤研究開発センター、大学文書館
	博士	
		システム情報科学研究院、附属図書館、附属図書館付設記録資料館、情報基盤研究開発センター、大学文書館

## ○資料 2 担当教員配置状況（平成 27 年 5 月 1 日現在）

	教授	准教授	講師	助教	小計	兼任教員	非常勤講師	計
修士課程	30	13	0	1	44	33	35	112
博士後期課程	21	11	0	0	32	0	0	32
注：修士課程専任教員のうち、30名は博士後期課程も専任、14名は修士課程のみ 博士後期課程専任教員のうち、30名は修士課程も専任、2名は博士後期課程のみ								

## 2) 外部組織との連携

3 専攻それぞれが、対象とする課題に応じて、企業、行政機関、地域社会、及び学内組織との連携により、本学府の特徴である課題解決に取り組むプロジェクトチームラーニングやインターンシップといった実践的教育が実現できている（資料 3）。

## ○資料 3 外部組織と連携した教育

専攻	連携内容
ユーザー感性学専攻	プロジェクトチームラーニング（PTL）で、企業、行政機関、地域社会等と連携し、これらが抱える課題を題材にチームで課題解決に取り組む演習を行っている。 注：プロジェクトチームラーニング 教員主導・講義中心の伝統的な教育手法ではなく、社会の現場において、問題設定、現場観察、仮説抽出、必要な知識の探索と統合、実践、振り返り、提案のとりまとめ、という一連のプロセスにチームで取り組む中で、問う、観る、考える、共感・協働する、表現するなどの人間力を総合的に涵養していく実践的な演習。
オートモー	1～4か月に及ぶインターンシップを必修科目としており、主に自動車産業の企業と

## 九州大学統合新領域学府 分析項目 I

ティブサイ エンス専攻	連携して、実践的な教育を行っている。また、材料科学における最先端の研究を教育に取り入れるため、特定教育研究講座という名称の講座を設け、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所の研究者が教育活動に従事できる編成としている。
ライブラリ サイエンス 専攻	本学附属図書館の職員に授業の補助者として協力してもらい、情報組織化と情報サービス等に関する実践的な教育を行っている。また、図書館等の学内組織の他、福岡アメリカンセンター、九州経済調査協会、麻生レコードマネジメント株式会社、国立公文書館等と連携しインターンシップを実施している。

## 1-1-(1)-② 多様な教員の確保の状況とその効果

本学府の特徴である実践的教育を行うため、実務経験を有する教員を多数配置している（資料4）。さらに、産学官から各専攻が取り扱う領域（感性価値、自動車、情報の管理・提供）の現場での実務経験が豊かな人材を非常勤講師として招聘し（資料5）、現場での課題や取組について講義している。

## ○資料4 実務経験を有する教員の配置状況（平成27年5月1日現在）

専攻	教員の職種、実務経験内容、教育における役割
ユーザー 感性学専攻	「感性」をもとにした芸術創作や価値創造、編集などの領域で第一線の活動を行ってきた以下の教員 修士課程専任教員 教授4名（デザイン・マーケティング等実務経験者3名、作曲家1名） 准教授3名（デザイン・メディア等実務経験者3名） 博士後期課程専任教員 上記のうち、教授1名（デザイン）、准教授2名（デザイン・メディア） 経験してきた実務のフィールドでPTLのテーマを設定し、またその人脈を利用して、企業、行政機関、地域社会と連携してPTLを実施しており、本専攻の実践的教育の中軸となっている。
オートモー ティブサイ エンス専攻	技術領域横断的に問題解決に当たってきた以下の教員 教授3名（自動車産業関連企業での研究開発業務） 准教授2名（自動車産業関連企業での研究開発業務） 自動車は、複合的な技術領域や課題領域で構成される。実務経験のある教員は、いかにして従来の学問分野の枠を超えて問題解決を図っていくかを、自らの経験を活かしながら、講義や演習、実験の指導、修士論文・博士論文の指導に反映させている。また、産業界との人脈を活かし、企業からの学外非常勤講師の確保にも貢献している。
ライブラリ サイエンス 専攻	学内組織で、実際に情報の管理・提供に携わってきた以下の教員 修士課程専任教員 教授1名（大学文書館教員） 准教授1名（現職の図書館員） 博士後期課程専任教員 上記の教授1名、准教授1名 文書館や図書館の現場における現実の課題を学生に伝える役割を担っている。

## ○資料5 産官学からの非常勤講師の招聘（平成27年度）

専攻	非常勤講師の所属
ユーザー感性学 専攻	リサーチ&プランニング会社 1名 集団の知的創造活動の支援・促進に関する特定非営利活動法人 1名 病院（子供医療支援室） 1名 子供の支援に関する一般財団法人 1名 他大学（教員） 1名
オートモー ティブ サイエンス専攻	自動車産業関連企業 11名、 他大学（教員） 10名 交通安全に関する独立法人 1名、 化学物質評価に関する一般財団法人 1名
ライブラリー	他大学（教員） 4名

サイエンス専攻	レコードマネジメント関連企業 1名 地方公共団体（公共図書館） 1名 その他 1名
---------	---

## 1-1-(1)-③ 入学者選抜方法の工夫とその効果

## 1) アドミッション・ポリシー

教育目的で掲げた本学府で養成する人材に、入学者が育っていくために必要な、入学者の問題意識や意欲、基本的な能力等に関して、アドミッション・ポリシー（AP）を定め、Web上で公開している（資料6、7）。特に、APの（1）（4）は知の統合、科学や社会の課題からの出発という本学府の教育目的を反映している。

## ○資料6 アドミッション・ポリシー

次のような資質と問題意識を持つ人材を対象として専攻毎に入学者選抜を行う。 （1）専攻の専門に係わる諸問題を学際的に解決し社会に成果を還元したいという意欲を有していること （2）社会において先導的役割を果たしたいという意欲を有していること （3）柔軟な発想力、基本的なコミュニケーション能力、幅広い教養を有していること （4）社会人にあっては、企業や地域社会での経験、問題意識を大学において理論的に進化・体系化させたいという意欲を有していること
---

## ○資料7 アドミッション・ポリシーを掲載したWebページのURL

<http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/>

## 2) 入学者選抜方法・実施の状況

多様な専門性を有する受験者を画一的な筆記試験で評価することは困難である。このため、3専攻とも口頭試問を重視した入学者選抜を行っており、受験者に対する公平性を担保している（資料8）。また、受験機会の提供のため、秋入学も実施している（資料8）。さらに、留学生、社会人を対象とした入学者選抜も実施している（資料9）。科学の出口の課題領域から科学の在り方を見直すという本学府の理念を実現するため、積極的に社会人を受け入れている（資料10）。

## ○資料8 特色ある学生の受入方法

口頭試問の重視	3専攻ともに、口頭試問を重視した入学者選抜を行っている。修士課程の口頭試問では、アドミッション・ポリシーが示す、問題意識、意欲、基本的能力を評価する。博士後期課程についても、アドミッション・ポリシーに挙げた観点に基づき、問題意識、学習意欲、専門知識、思考力、将来計画等を総合的に評価して行う。
秋入学	秋期入学については、主に外国人留学生の受験機会を提供するという理由から、ユーザー感性学専攻、オートモーティブサイエンス専攻で実施している。ライブラリーサイエンス専攻は、図書館情報学、アーカイブズ学を学んで来なかった者も修学できるように、それらを学ぶ基礎科目を主に1年前期に配置しているため、秋期入学は実施していない。

## ○資料9 留学生・社会人のための入学者選抜方法の例

留学生対象	学修能力、研究能力、語学力、人格等を外国人留学生特別選抜の面接試験において総合判定して選抜している。
社会人対象	これまでの研究関連の業績、研究能力、人格等を社会人特別選抜の面接試験において総合判定して選抜している。

## ○資料 10 大学院課程の入学者選抜の実施状況

(修士課程) 平成 27 年 4 月 1 日入学者

一般選抜	社会人特別選抜	外国人留学生特別選抜
募集人数( 61 人)	募集人数( 若干人 )	募集人数( 若干人 )
合格人数( 53 人)	合格人数( 5 人)	合格人数( 13 人)
入学人数( 46 人)	入学人数( 5 人)	入学人数( 10 人)

(博士後期課程) 平成 27 年 4 月 1 日入学者

一般選抜	社会人特別選抜	外国人留学生特別選抜
募集人数( 14 人)	募集人数( 若干人 )	募集人数( 若干人 )
合格人数( 2 人)	合格人数( 4 人)	合格人数( 2 人)
入学人数( 2 人)	入学人数( 3 人)	入学人数( 2 人)

## 3) 入試方法等に関する検討状況と改善の具体例

各専攻の入試 WG (ワーキンググループ) 等で入試方法などの適否の検討が絶えず行われている。ライブラリーサイエンス専攻では平成 27 年度修士課程入学者選抜試験より TOEIC/TOEFL の外部試験を活用するように変更し、入学者の基礎学力の向上が認められた(資料 11)。

## ○資料 11 入試方法等に関する検討状況と改善の具体例

検討状況	各専攻が主体的に行っている入試方法等の適否や学府全体としての整合性に関しては、副学府長(専攻長)の元に構成される入試ワーキンググループ等において絶えず検証を行っている。
改善事例	ライブラリーサイエンス専攻では、設置当初、書類審査、小論文、口頭試問(英語による質問も含む)だけで、合否の判定をしていたが、基礎学力の把握が難しい場合があったため、2014 年度修士課程入学者選抜試験より英語の筆記試験も導入し、さらに 2015 年度修士課程入学者選抜試験より TOEIC/TOEFL の外部試験を活用するようにした。これにより、修士課程での修学に必要な入学者の基礎学力を担保できるようになった。

## 1-1-(2) 内部質保証システムの機能による教育の質の改善・向上

## 1-1-(2)-① 教員の教育力向上のための体制の整備とその効果

主に、各教員の所属研究院等が主催する FD により、教育力向上を図っている。この他、専攻や学府の FD も実施している(資料 12)。

## ○資料 12 専攻、学府独自の FD

- 平成 23 年に、オートモーティブサイエンス専攻で、“UNESCO’s recommendations for teaching to undergraduate students” と題する授業設計の考え方・手法に関する FD を実施し、各教員の授業設計の参考とした。
- 本学では自殺する学生数が多いことが問題になってきており、このため、平成 27 年度 12 月に、学生のメンタルヘルスに関する学府 FD を開催した。

## 1-1-(2)-② 教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

## 1) 学生からの意見聴取の取組

本学府では、専攻ごとに受講生による授業評価アンケートを実施して意見聴取を行っている。教員は自身の授業に関するアンケート結果を閲覧し、問題点の把握と改善に努めている。また、アンケートの集計結果を各専攻の教務 WG で評価・分析し、各専攻の運営会議で、問題の共有、及び改善に向けた検討を行っている(資料 13、14)。

この他、ライブラリーサイエンス専攻では、ラウンドテーブル(全学生と全専任教員と

の懇談会)を年に1、2回実施し、対応を専攻運営会議で討議しフィードバックを図っている(資料15)。

#### ○資料13 授業評価アンケート分析結果(平成26年度)

各年度各学期の調査結果からは、全体的に学生は授業に満足していることがわかる。授業評価アンケートの結果から総合的に判断して、授業の理解度、満足度は高い水準にある。

平成26年度の授業評価アンケートでは、開講科目196のうち138科目を対象に実施し、アンケートを836配布し、438回収した(回収率52.4%)。専攻個別の平成26年度の分析結果の概要は以下の通りである。

##### (ユーザー感性学専攻)

学生の出席状況は良好で、「欠席なし」が33.6%にもものぼる。「欠席1～3回」が49.7%であるが、「欠席4回以上」は0.6%にすぎない。授業の理解度については「理解できた」が95.1%に達し、満足度についても「満足度 高い」73.8%、「満足度 普通」が24.8%と100%に近い。

##### (オートモーティブサイエンス専攻)

学生の出席状況は良好で、4回以上欠席との回答はゼロであった。授業の予習・復習については、科目ごとに差がみられ、30分以上が4割近くある一方、30分未満も4割強おり、授業外の学習強化は今後の課題である。授業の理解度は良好(9割近くがほぼ理解)だが、残り1割があまり理解できなかったと回答している。今後の課題としては、専門外の授業を受講する学生への配慮や支援体制を充実することがあげられる。

##### (ライブラリーサイエンス専攻)

学生の出席状況は良好で、欠席したとしても3回以内がほとんどである。授業の予習・復習については、科目ごとに差が見られたが、何もしていないという回答はゼロであった。授業の理解度もおおむね良好で、特に新しい知識の獲得については、7割以上が満足しているとの回答であった。改善点としては、授業時間外での学習時間が少ない科目に対して、予習復習を促す仕組みの必要性、シラバスをもっと周知すること、PTL Iの構成・内容を充実させること、などが挙げられる。

#### ○資料14 授業評価アンケート(平成26年度)を受けた改善の例

- 授業時間外の学習時間が少ない科目については、授業時間の中で予習・復習に対する指示や課題を出すなどの取組をするようにした。
- 専門外の授業を受講する学生に対しては、以下のように対応。
  - 必要があれば、当該科目の開設学期前の事前学習指導、講義後の個別指導をする(ライブラリーサイエンス専攻)、
  - その分野について入門的に学習できる概論科目(オートモーティブ先端材料科学概論、オートモーティブダイナミクス概論など5分野5科目)を用意しており、これらの受講を勧めることで当該分野の概要がつかめるように指導する(オートモーティブサイエンス専攻)。

#### ○資料15 その他の学生からの意見聴取の取組

- ライブラリーサイエンス専攻では、年1～2回、ラウンドテーブルと称する食事を交えた全専任教員と全学生との懇談会を行って、専攻の教育体制、授業・研究、学生生活に渡る様々な問題について学生からの意見聴取を行っている。

これまでの意見聴取の結果、学生用のプリンタの設置、エアコンのクリーニング等の設備に関する改善を行った。また、基本文献や最新の研究動向などの情報(文献リスト)を早い時点で提供してもらいたいという授業に対する要望があり、学生の主体的学習を進める上でも意義があるため、教員側でも留意するようになった。

#### 2) 学外関係者からの意見聴取の取組

定期的なアンケート、面談やシンポジウムなどを通じて産業界及び社会情勢の変化を適切に把握している(資料16)。聴取した意見については、専攻運営会議にて討議し、情報共有を図っている。たとえば、オートモーティブサイエンス専攻のインターンシップ懇談会での意見聴取は、インターンシップの実施要領の改善に繋がっている。

## ○資料 16 学外関係者からの意見聴取の取組の具体例

- ユーザー感性学専攻では、平成 26 年と 27 年に入学志願者の開拓を主目的に「感性フォーラム」と題するイベントを行い、「感性」をめぐる学びと実践について幅広い意見交換を行った。このフォーラムで、「ユーザー感性学」という新しい学問と教育の展開にあたっては、社会に向けた情報発信をもっと強化すべきという意見が提出された。現場実践での学びを重視する専攻として、社会連携を強め、発信力を高めることで、教育の質を高めていく必要を再認識し、次の取組に向けた検討を行っている。
- オートモーティブサイエンス専攻では、インターンシップ懇談会を毎年開催し、インターン受入企業の担当者から意見・要望を聴取している。これまでに、
  - 受入企業と学生のマッチングの改善
  - 学生とテーマ設定のミスマッチの解消の必要性
  - 機密情報の取り扱いの改善
  - インターンシップ中の学生の生活環境の改善
 等が意見として出され、これらを反映してインターンシップの実施要領を改善した。  
 また、2012 年 1 月 29 日には、オートモーティブサイエンス研究会「インターンシップが繋ぐ企業と大学の人づくり」と題したセミナーを開催し、企業が大学に求める人材育成の在り方について産学で検討を行った。
- ライブラリーサイエンス専攻では、定期的に（数年に 1 回）学外関係者から意見聴取を行うこととしている。平成 24 年 10 月～11 月学外関係者からの意見聴取のための以下のアンケート調査を行った。
  - 対象：企業（一部上場の企業から 200 社をランダムサンプリング、内レコードマネジメント会社を除く 195 社）、レコードマネジメント会社 85 社、大学 86 校、有識者 45 名。回収数 84。
  - 内容：本専攻のカリキュラムに対する意見、現場での情報の管理提供に必要な知識・技能について、等。
 また、平成 27 年 12 月～平成 28 年 1 月に記録管理・アーカイブズに関心を持つ学外の有識者（4 名）への本専攻の教育や学生に関する意見聴取を行い、次のような評価を頂いている。
  - 日本にはまだ記録情報管理のスペシャリスト育成の教育機関は極めて少ないのが現状である。他の教育機関に先駆けて、この分野の人材育成に着手された貴専攻に期待は大きい。
  - 現用の記録を取り扱うレコードマネージャーと、非現用の記録を取り扱うアーキビストの専門家不足が、先進諸外国に比べ我が国の大きな問題である。本専攻はアーカイブズの充実とアーキビストの育成に先端的な取組を行っている。
  - 資料論よりも活動論・機能論が教育の中心であり、システムやデータ管理を重視したカリキュラムは素晴らしいと思う。
  - 県と連携して実施した保存期間が満了した廃棄予定行政文書ファイルの評価選別のように、本専攻が外部機関と連携して実施した活動は、外部機関にとっても本専攻にとっても経験と考えられる。ライブラリーサイエンスやアーカイブズ学の新たな軸足として期待できる。

## 3) 全学的な教育活動の改善の取組

本学の P&P の助成を受けて、人材教育におけるインターンシップの効果を広くアピールし、人材育成を目指した産学連携の下地を築いた（資料 17）。

また、EEP の助成を受け、教育活動改善の取組を行っている（資料 18）。特に、平成 23 年度から平成 27 年度にかけて複数の課題で EEP の助成（代表部局：附属図書館）を受けて、図書館による自律的学習を支援する体制を築くのに協力し、本学が目指すアクティブ・ラーニングの促進に大きく貢献した。

## 九州大学統合新領域学府 分析項目 I

## ○資料 17 本学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト (P&amp;P) Cタイプ：教育研究システム改革プログラム支援採択状況

採択年度	専攻	概要
平成 22 年度	オートモーティブサイエンス	<p>次世代自動車開発人材育成のための産学官連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>福岡モータショー2012にて、企業－大学連携を人財育成の面からディスカッションする研究会を開催。マツダ(株)から基調講演者を招くとともに、AMS インターンシップ関連企業からパネラーはじめ参加者を得た。体験学生が講演し、インターンシップの効果をアピールした。</li> <li>2011 年度補正予算で獲得した設備「情報利用型人間－自動車－交通流相互作用系シミュレーションシステム」の竣工を期に、同設備の導入効果をアピールした。(財)本学学術研究都市推進機構の協力を得て、自動車会社、自動車部品会社、福岡県、福岡市、北九州市などが設備概要やそのポテンシャルを理解し、今後の共同研究など産学連携へつながることが期待できることとなった。</li> <li>上記設備の仕様・概要など詳細を説明するパンフレット及びデジタルデータを作成し、企業他に広く配布。同パンフレットは本学学術研究都市推進機構が配布に協力しており、今後の共同研究など産学連携への橋頭保を築いた。</li> </ul>
<p>※注：P&amp;P プロジェクト（教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト） 一定の期間、研究費等の重点配分を行い、教育と研究の一層の発展を図ることを目的とする本学独自の研究支援制度。集中的に支援することで、研究の一層の発展を促し、新たな競争的資金の獲得の原動力となっている。</p>		

## ○資料 18 教育の質向上支援プログラム (EEP) 採択状況

採択年度	専攻	取組課題
平成 23～24 年度	ユーザー感性学	<p>学際専攻の実践感性強化ネットワークの構築</p> <p>【概要】学際専攻の実践感性強化ネットワークの構築ユーザーの視点に立った新たな提案のできるプロデューサー型の人材を養成する目的としたこれまでの経験・蓄積を踏まえ、既存の職種や企業体のカテゴリーに収まらない新しい社会的機能を果たす高度ユーザー感性を持つ学生たちを支援する組織的な取組として、以下の3つを目的としたプログラム開発を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>仕事・職業・働き方を支援するソーシャルメディアコミュニケーション、</li> <li>様々な職種を超えてユーザー感性力を高める高度社会人育成プログラム、</li> <li>将来的に学府の枠を越えた「九州大学キャリアイノベーションネットワーク」。</li> </ul>
平成 23～24 年度	ライブラリーサイエンス専攻(代表部局:附属図書館)	<p>ICTによる自律的学習・教育体制の構築</p> <p>【概要】ICTと学術情報基盤を活用した全学的な教育基盤の価値を最大限に生かし、自律的学習を促す教育を支援するため、附属図書館とその付設教材開発センター、ライブラリーサイエンス専攻が一体となって、学術情報利用に関する各種調査、教職員向けインストラクショナル・デザイン研修、学生協働による学習支援プログラムの開発・実施、eラーニング教材の開発・開発支援・利用促進、学務関係組織との連携構築に取り組んだ。</p> <p>【成果】平成 24 年 3 月から中央図書館に導入した図書館学習サポーター(Cuter)との学生協働による新入生向け図書館活用セミナーの実施、Web上の学習ガイド(Cute.Guides)の作成、モバイルデバイス(iPad)の利用促進、教職員向けインストラクショナル・デザイン研修による理論に基づく教授方法推進のための人材育成等に多大な成果を挙げ、事後評価において「A:当初計画は順調に実施され、期待以上の優れた成果が挙げられている。」との最上級の評価を得た。</p>
平成 25～26 年度	ライブラリーサイエンス専	<p>大学図書館による自律的学修支援体制の構築</p> <p>【概要】自律的な学修を促す教育を支援するため、附属図書館とその付設教材開発センター、ライブラリーサイエンス専攻が一体となって、学生協働による学習支援プログラムの充実と発展、自律的学修支援を推進する人材開発、基幹</p>

	攻(代表部局:附属図書館)	<p>教育との連携、効果的な学修支援を推進するための各種調査、電子教材の拡充と利用促進、ライブラリーサイエンス専攻における教育・研究との連携を行った。</p> <p>【成果】大学院生から成る図書館学習サポーター (Cuter) を、中央図書館に加え、伊都図書館、医学図書館の3館に配置し、学生協働による学修支援を拡充し定着させた。また、教職協働により基幹教育との連携を進め、カリキュラムの進行に応じた講習会の実施、学生向け自学自習教材「アクティブ・ラーナーへの第一歩」の共同作成、図書館活用に関する初年次学生向けのゲーム教材の開発等において顕著な成果を挙げ、事後評価で「A:期待どおりの成果が得られている。」との最上級の評価を受けた。</p>
平成 27 年度	ライブラリーサイエンス専攻(代表部局:附属図書館)	<p>教育の国際化に対応した学修支援環境の構築</p> <p>【概要】附属図書館が構築してきた学修・教育支援体制を継承し、グローバル化の観点から発展させるため、附属図書館とその付設教材開発センター、ライブラリーサイエンス専攻が一体となって、国際化拠点図書館開館に向けた図書館学習サポーター事業の推進、教育の国際化を支えるコンテンツ整備体制の構築、教育の国際化に対応した図書館利用教育の拡充、基幹教育支援の拡充、学修支援を推進する人材育成の各事業を実施する。</p> <p>【成果】平成 23 年度から進めてきた図書館学習サポーター (Cuter) との学生協働による学習支援活動の実績が評価され、「九州大学ティーチング・アシスタント実施要項」の改正により、平成 27 年 12 月から Cuter が授業外学習のための教育支援を行う TA として正式に位置付けられ、本学の教育制度の中に組み込まれたことは大きな成果であり、全国的にも先進的な取組である。</p>
<p>※注：EEP</p> <p>平成 21 年度から実施している教育の質向上支援プログラム (EEP) は、中期目標・中期計画に掲げる教育に関する目標・計画の達成に資する部局等の主体的な取組を支援することにより、教員及び組織の教育力の向上を図り、本学の教育改革を推進することを目的とするものである。</p>		

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

#### 組織編成上の工夫 (1-1-(1)) について

教育目的達成のために必要となる、「多様な学問分野の知の教授」と「課題解決に取り組む実践的教育」を、学内の研究院等からの様々な専門性を持つ教員の本学府への配置、実践的教育の実施のための学内外の組織との連携、実務経験を有する多数の教員の配置、産学官からの実務経験豊かな非常勤講師の招聘、といった組織編成上の工夫により実施できている。

#### 内部質保証システムの機能による教育の質の改善・向上 (1-1-(2)) について

アンケートや懇談会等により学生及び学外関係者からの意見を聴取し、それらの評価・分析結果を専攻運営会議で報告・検討し、問題の共有、及び、改善に向けた検討を行っている。さらに、本学の P&P プロジェクトや EEP の助成を受けて、本学府の教育目的に則した教育手法等の開発を行うとともに、本学が目指すアクティブラーニングの促進に大きく貢献した。

以上より、前述の教育目的を達成するための工夫や内部質保証が実効的に機能していると考えられることから、前述の想定する関係者の期待する水準にあると判断される。

## 観点 1-2 教育内容・方法

(観点に係る状況)

## 1-2-(1) 体系的な教育課程の編成状況

## 1-2-(1)-① 学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)

本学府で養成する人材に求められる能力を、各専攻が対象とする課題の領域(感性価値、自動車、情報の管理・提供)に沿って具体化し、知識・理解、技能、態度・志向性の観点でまとめたディプロマ・ポリシーを策定し公開している(資料 19、20)。ユーザー感性学専攻には「ユーザーの福祉、満足を実現し、新たな科学、社会、経済を築いていくための企画力、コミュニケーション力、協働力、指導力の養成」、オートモーティブサイエンス専攻には「自動車という対象に向けて工学から人間科学、社会科学までを横断する専門知識や技能を活用した問題解決能力の養成」、ライブラリーサイエンス専攻には「学際的な知識・理解とユーザーの視点に立った情報サービス能力の養成」に特色がある。また、どのような場でどのように活躍する人材かが容易にわかるように、具体的な人材像の例を別途定め公開している(資料 21、22)。

## ○資料 19 ディプロマ・ポリシー

専攻	ディプロマ・ポリシー
ユーザー感性学専攻	<p><b>【修士課程】</b>            本課程を修了した者は、次の能力を備える。第一に、知を統合してユーザーの感性と融合することにより、ユーザーの福祉、満足を実現して、新たな科学、社会、経済を築いていくための企画力、コミュニケーション力、協働力、指導力などを備えていること。第二に、ユーザー感性学としての「感性を科学的な視点から捉えることのできる力」、「人と人、人との又は人と環境のあいだの関係性を感性の視点から豊かにできる力」及び「ユーザーの視点に立って感性価値創造のプロセスをマネジメントできる力」を身に付けることで産官学領域において重要な役割を担えること。            上記の能力は、さらに具体的に下記の項目からなる。</p> <p>(1) 知識・理解            学生本人の出身分野や関心領域を活かし、ユーザー感性学という専門分野を説明できる。  <u>実社会の現実の課題に対し、チームで取り組み、ユーザーの感性を用いて高度な解決策を提案できる。</u>            PTL(プロジェクトチームラーニング)及びインターンシップにより、実践的な場面で有用な知識と包括的な社会人基礎力や応用力を習得している。            感性科学コース、感性コミュニケーションコース、感性価値クリエーションコースの3コースにおける各専門性を活かした、より高度な知識と実践力を習得している。</p> <p>(2) 技能            (2-1) 専門的能力            企業での感性評価技術の開発及び製品評価の研究開発ができる。            企業のマーケティング調査及び製品企画に関わる企画研究ができる。            医療、福祉、教育現場などにおける課題解決の為に調査・研究ができる。            大学等の公的研究機関において教育または研究ができる。            (2-2) 汎用的能力            感性を科学的な視点から捉えることができる。            人と人、人との又は人と環境の関係をユーザー感性学の視点からとらえ、豊かなものにしていく能力がある。            ユーザーの視点に立って感性価値創造のプロセスをマネジメントできる。  <u>企業や行政、地域社会に入り、現場が抱える課題を体験することや、現実的な課題にチームで取り組み、問題発見、仮説設定、集団的な知的創造、解決策提示の一連のプロセスを主導的に推進し、社会との新しい関係を構築できる。</u></p> <p>(3) 態度・志向性            ユーザー感性性に立脚し、さらなる知識や技術の修得ができる。  <u>幅広い見識と教養を身につけ、人の感情や物事の本質を理解し組織を動かすことができる。</u></p>

	<p>【博士後期課程】</p> <p>本課程を修了した者は、次の能力を備える。第一に、知を統合してユーザーの感性と融合することにより、ユーザーの福祉、満足を実現して、新たな科学、社会、経済を築いていくための企画力、コミュニケーション力、協働力及び指導力に加え、それらを統合する研究開発能力を有していること。第二に、「感性を科学的な視点から捉えることのできる力」、「人と人、人との又は人と環境のあいだの関係性を感性の視点から豊かにできる力」及び「ユーザーの視点に立って感性価値創造のプロセスをマネジメントできる力」に基づき、それらを統合する新しい専門領域を産官学領域において研究、実践し、国内のみならず、国際的な研究活動に積極的に貢献できることと。上記の能力は、さらに具体的に下記の項目からなる。</p> <p>(1) 知識・理解</p> <p><u>実践的な知の習得により、ユーザー感性学に特化した高度な課題解決力を有する。</u></p> <p>博士 (Ph. D.) として国際的に通用する高度の専門性と広範で深い文化的・知的素養を持つ。</p> <p>「ユーザー感性学」に関するより高度で統合的な教育研究と、感性科学、感性コミュニケーション、感性価値クリエーションの3領域の各専門性を相乗的に強化し、より高度な研究成果等を構築できる。</p> <p>(2) 技能</p> <p>(2-1) 専門的能力</p> <p>国際性と社会性を共存するリベラルで専門的な研究・教育能力を有する。</p> <p><u>即戦力となる「高度実践調査」、「高度実践企画」及び「高度実践研究能力」を持つ。</u></p> <p>感性に関わる科学・芸術・文化・デザイン・コミュニケーション等について深く理解する解釈力・鑑賞力・分析力を有する。</p> <p>(2-2) 汎用的能力</p> <p>感性科学領域、感性コミュニケーション領域、感性価値クリエーション領域の3領域の統合により、さらなるユーザー感性学の幅広い知識、研究能力及び実践能力を持つ。国際社会が求めるユーザー感性の研究能力及び実践能力を持つ。</p> <p>(3) 態度・志向性</p> <p>大学や企業などの研究機関における実践型研究者あるいは教育者、即戦力としての活躍が十分に期待できる。</p> <p><u>国際社会に必要とされる問題解決型のプロジェクトチームのリーダーとして指導的な立場で参加し、プロジェクトを遂行する能力を持つ。</u></p> <p><u>市民社会の中でフロンティアを開く気概と高い動機を有する。</u></p>
オートモティブサイエンス専攻	<p>【修士課程】</p> <p>本課程を修了した者は、次の能力を備える。第一に、産業界、研究機関、行政機関などで自動車に関わる分野において中核的な役割を果たす専門知識や技能を身に付けていること。第二に、<u>応用化学、機械工学、電気・電子工学、心理学、経済学などの自ら専攻した一つまたは複数分野の専門知識を自動車の研究開発、政策策定などに応用する方法を備えていること。</u></p> <p>上記の能力は、さらに具体的に下記の項目からなる。</p> <p>(1) 知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <u>応用化学、機械工学、電気・電子工学、心理学、経済学などの自ら専攻した学術と、自動車の技術開発、企業経営などとの関連を説明できる。</u></li> <li>• 次世代の自動車に対するニーズを現実の自動車や自動車に関する政策などとして具現化するプロセスや手法を理解している。</li> </ul> <p>(2) 技能</p> <p>(2-1) 専門的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 主専攻として専攻した専門分野の知識を活用し、解決方針が示されれば、具体的な課題解決に着手できる。</li> <li>• <u>異分野の専門家とチームを組み活動する場合など、隣接する異分野の専門家に、自分分野の役割や限界を説明できる。</u></li> </ul> <p>(2-2) 汎用的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 与えられた課題に対する工程管理ができる。</li> <li>• <u>異分野の専門家と共同で課題解決にあたる時、異分野の専門家の要求や要請の意味を正しく理解できる。</u></li> <li>• プロジェクトを運営する場面で、自分に割り振られたタスクの進捗を促す工夫ができる。</li> </ul> <p>(3) 態度・志向性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 国内外の社会情勢や文化に興味を持ち、次世代自動車に関するニーズを捉えよう</li> </ul>

	<p>とする態度を有している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己の専門分野に拘らず、必要な技術や情報を得るために、他分野の動向に関心がある。</li> </ul> <p>【博士後期課程】</p> <p>本課程を修了した者は、次の能力を備える。第一に、産業界、研究機関、行政機関などで、自動車に関わる分野において新たな価値創造に主導的な役割を果たす専門知識や技能を取得している。第二に、<u>応用化学、機械工学、電気・電子工学、心理学、経済学などの自ら専攻して取得した専門分野の知識を基に、自動車の研究開発や政策策定の場面で新たな方法論を展開できる。</u></p> <p>上記の能力は、さらに具体的に下記の項目からなる。</p> <p>(1) 知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><u>応用化学、機械工学、電気・電子工学、心理学、経済学などの自ら専攻した分野の知識が、コア・コンピューテンシーとして機能しており、専門家の立場から自動車の技術開発、企業経営などの新しい手法を提案できる。</u></li> <li>次世代の自動車に対するニーズを現実の自動車や自動車に関する政策などとして、実際に具現化してゆくうえでの方向性を示すことができる。</li> </ul> <p>(2) 技能</p> <p>(2-1) 専門的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自動車に関する課題を、専攻した分野の専門家の立場から分析し、解決案を提示できる。</li> <li><u>異分野の専門家と課題解決案を論議し、分野横断型の解決案を立案できる。</u></li> </ul> <p>(2-2) 汎用的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自動車に関する社会的課題やニーズを発掘し、整理したうえで、個々の学術分野の課題に分解し、プロジェクトを立案できる。</li> <li>専門家の視点を出発点として、組織運営ができる。</li> </ul> <p>(3) 態度・志向性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>当該分野の専門家としての信頼を得ており、国内外に人脈を有し、次世代自動車に関するニーズや情報を捉えることができる。</li> <li><u>自己の専門分野に拘ることなく、必要に応じて異分野の課題に挑戦できる。</u></li> </ul>
ライブラリーサイエンス専攻	<p>【修士課程】</p> <p>本課程を履修した者は、次の能力を備える。第一に、図書館や文書館、組織の文書管理業務の部署、情報システムメーカー、情報サービス企業等、情報の管理・提供に関わる分野において中核的な役割を果たす専門知識や技能を身に付けていること。第二に、身に付けた専門知識や技能をユーザーの視点に立った情報の管理・提供に実践する考え方や態度を、身に付けていること。</p> <p>上記の能力は、さらに具体的に下記の項目からなる。</p> <p>(1) 知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><u>図書館情報学と記録管理学・アーカイブズ学の両学問分野に共通する情報の管理・提供の基礎を理解している。</u></li> <li><u>情報の管理・提供に関わる情報システムの構成法、利用法を説明できる。</u></li> <li><u>情報の管理・提供に関わる社会的・法的側面を説明できる。</u></li> <li><u>情報技術を用いた学習やコミュニケーション等の基礎理論を説明できる。</u></li> <li><u>調査の方法論、データ分析の基礎を理解している。</u></li> </ul> <p>(2) 技能</p> <p>(2-1) 専門的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個々の情報の性格を見極め、適切に管理・提供することができる。</li> <li>情報システムを利用した情報の発信、データの収集ができる。</li> <li><u>情報の管理・提供に関わる情報を求めるユーザーのニーズを調査分析できる。</u></li> <li>異分野の専門家とチームを組み活動する場合に、隣接する異分野の専門家に自分の役割や限界を説明できる。</li> </ul> <p>(2-2) 汎用的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>現状の情報の管理・提供に関する課題を把握することができる。</li> <li><u>情報の管理・提供組織において、ユーザーの視点に立った情報サービスを企画・立案できる。</u></li> <li>異分野の専門家と共同で課題解決にあたる時、異分野の専門家の要求や要請の意味を正しく理解できる。</li> </ul> <p>(3) 態度・志向性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>関連する専門外の領域の課題、技術、方法論等に興味を持ち、知識の収集ができる。</li> </ul>

	<p><b>【博士後期課程】</b>          本課程を履修した者は、次の能力を備える。          第一に、独立して研究を行うことができること、第二に、図書館や文書館、組織の文書管理業務の部署、情報システムメーカー、情報サービス企業等、情報の管理・提供に関わる分野において主導的な役割を果たす専門的知識や技能を身に付けていること。第三に、身に付けた専門知識や技能を基に、ユーザーの視点に立ったこれからの情報の管理・提供のあり方について研究できること。          上記の能力は、さらに具体的に下記の項目からなる。</p> <p>(1) 知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <u>図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学、情報の管理・提供に関わる情報科学の3領域のうち、少なくとも1つの領域における考え方、理論・方法を十分に理解し、残りの領域についても、代表的な考え方、理論・方法を説明できる。</u></li> <li>• <u>情報の管理・提供に関わる社会的・法的側面を説明できる。</u></li> <li>• <u>情報技術を用いた学習やコミュニケーション等の基礎理論を説明できる。</u></li> <li>• <u>調査の方法論、データ分析の基礎を理解している。</u></li> </ul> <p>(2) 技能</p> <p>(2-1) 専門的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <u>上記3領域のうち、専門としない領域の知見でも、必要があればそれを取り入れて課題解決を行うことができる。</u></li> </ul> <p>(2-2) 汎用的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 現状の情報の管理・提供に関する課題を把握することができる。</li> <li>• <u>情報の管理・提供組織において、ユーザーの視点に立った情報サービスを企画・立案できる。</u></li> </ul> <p>(3) 態度・志向性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 従来の枠組みに捕らわれることなく情報の管理・提供のより良い仕組みを探求できる。</li> <li>• 関連する専門外の領域の課題、考え方、技術・方法論等に興味を持ち、知識の収集ができる。</li> <li>• 独立して研究できる、つまり、研究計画の立案、文献調査、実験あるいはデータ収集、結果の解析及びその解釈や考察を行い、得られた知見・成果を的確に表現できる。</li> </ul>
--	---

## ○資料 20 ディプロマ・ポリシーを掲載した Web ページの URL

専攻	ディプロマ・ポリシーを掲載した Web ページの URL
ユーザー感性学専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/kansei/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/kansei/</a>
オートモーティブサイエンス専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/automotive/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/automotive/</a>
ライブラリーサイエンス専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/library/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/library/</a>
※ アドミッション・ポリシーの記述中に併記。 また、ライブラリーサイエンス専攻では、 <a href="http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/">http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/</a> に独自ホームページを持ち、そこにも記載している。	

## ○資料 21 養成する人材像の具体例

専攻	具体的人材像
ユーザー感性学専攻	<p><b>【修士課程】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 感性を基に新たなビジネス展開や商品開発などを行おうとする民間企業の企画部門、開発部門、研究部門の社員</li> <li>• 教育、医療、福祉現場などで感性に配慮したサービスを行う教師、医師、看護師、チャイルド・ライフ・スペシャリスト、ケアマネージャー</li> <li>• 行政組織や社会において感性に配慮したサービスを行う公務員や NPO 職員</li> <li>• 感性や心に関係する新しい研究を開拓する研究機関の研究者</li> <li>• ユーザー感性学に基づきユーザーと感性に関する提言を行うコンサルタント、コミュニケーター、ジャーナリスト</li> </ul> <p><b>【博士後期課程】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 企業での感性評価技術の開発及び製品評価の研究開発者</li> <li>• 企業のマーケティング調査及び製品企画に関わる企画研究者</li> <li>• 医療、福祉、教育現場などの情報サービスの調査・企画研究者</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学や公的研究機関の教育または研究者</li> </ul>
オートモーティブサイエンス専攻	<p>【修士課程】</p> <p>自動車をはじめとする機械工業、エレクトロニクス・情報、材料・化学などの産業における</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究開発部門のエンジニアや研究者</li> <li>生産技術分野のエンジニアや管理者</li> <li>技術経営分野の管理者</li> <li>公官庁における産業政策立案者</li> </ul> <p>【博士後期課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自動車をはじめとする機械工業、エレクトロニクス・情報、材料・化学などの産業における研究開発部門の研究者</li> <li>大学や各種研究機関の研究者</li> <li>公官庁における産業政策立案者</li> </ul>
ライブラリーサイエンス専攻	<p>【修士課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ステークホルダーの要求に応え、かつ、組織の活性化に繋がる文書・記録の適切な管理・提供を行うレコードマネジャー、アーキビスト</li> <li>主題に関する専門知識を有し、ユーザーをガイドできる情報専門職</li> <li>情報通信技術を応用し、ユーザーの視点に立った情報システムの設計や開発を行うエンジニア、または、設計に関与できる情報専門職</li> </ul> <p>【博士後期課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学や各種研究機関の研究者</li> <li>情報を管理・提供する組織における、問題解決、戦略立案及び指導を行う管理者</li> <li>情報通信技術を応用し、ユーザーの視点に立った情報システムの設計や開発を行うエンジニア</li> </ul>

## ○資料 22 養成する人材像の具体例を掲載した Web ページの URL

専攻	ディプロマ・ポリシーを掲載した Web ページの URL
ユーザー感性学専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/kansei/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/kansei/</a>
オートモーティブサイエンス専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/automotive/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/automotive/</a>
ライブラリーサイエンス専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/library/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/library/</a>

## 1-2-(1)-② 教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー）

カリキュラムポリシーを定め、公開している（資料 23、24）。

教育目的との関係で特筆すべき事項は、教育目的で掲げた人材を養成するために必要となる多様な学問分野の知の教授と、課題の把握とその解決に取組む実践的な教育を実施するため、関連する多様な学問分野の科目の配置、多様な履修モデル、主専攻・副専攻制（オートモーティブサイエンス専攻）や卒業要件、指導教員による履修指導、及び、実践的な学習の場を提供するプロジェクトチームラーニング（PTL）とインターンシップ科目の設定といった工夫がなされていることである（資料 25）。オートモーティブサイエンス専攻のインターンシップでは約 60%の学生が 60 日以上インターンシップを実施し、かつ、最先端のテーマに取り組んでいる（資料 26）。ユーザー感性学専攻及びライブラリーサイエンス専攻の PTL でも現実の課題に対して、その課題解決に学生が主体的に取り組んでいる（資料 27、28）。

## ○資料 23 カリキュラム・ポリシー

専攻	カリキュラム・ポリシー
ユーザー感性学専攻	<p>【修士課程】</p> <p>感性についての教育研究を先導的に展開するために、「実践型教育の実施及び大学と社会の連携推進」というミッションを設けている。</p>

	<p>教育課程の編成実施に関しては、問題の発見・分析・解決を自主的に行う姿勢を有し、応用を常に意識して基礎理論の学習に取り組めるよう、学生 1 人ひとりに応じた、きめ細かい履修指導を行う。また、社会での活躍やキャリア像を念頭においた効果的な学習計画を立てられるように、<u>多様な履修モデルを用意</u>している。さらに、ユーザー感性学の広範な研究分野を理解するのに不可欠な基礎知識の習得とあわせ、基礎知識の実践的活用に向け、実社会の課題に対し、その解決を目指してチームで取り組む、<u>PTL (プロジェクトチームラーニング) 及びインターンシップにより、実践的な場面で有用な知識と包括的な社会人基礎力や応用力の修得・開拓を促す</u>ことを基本方針としている。</p> <p>【博士課程】</p> <p>感性についての教育研究を先導的に展開するために、「実践型教育の実施及び大学と社会の連携推進」というミッションを設けている。</p> <p>教育課程の編成実施に関しては、「感性に関する客観的測定・分析・評価による感性の研究」、「多様なユーザーを支援し、感性を育む快適で安心できる居場所とコミュニティ、製品・サービスや知財の創造」、「人の感性を基にした心の充足・感動・共感という価値創造による、産業や地域社会、生活の革新」を目的とした、より高度で統合的な教育研究を行うために、本専攻修士課程にある 3 つのコースの専門性の「特化」力とそれぞれのコースの積極的な「統合」力を高め、実践型能力に加え、研究型能力の修得・開拓を促すことを基本方針としている。</p>
オートモーティブサイエンス専攻	<p>【修士課程】</p> <p>オートモーティブを出口として教育研究の焦点を定め、自動車直面するグローバルで複合的な課題の理解に加え、問題解決の基礎となる専門知識の習得、さらには多面的な視座や学際的なアプローチにより問題解決に実践的に取り組む能力を身に付けられるよう教育課程を編成する。具体的には、下記の方針で教育課程の編成を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>出口 (自動車) を常に意識して基礎から応用分野まで学べるよう科目を編成・配置</u>する。学生 1 人ひとりのニーズに応じた <u>幅広い履修モデルを用意</u>するとともに、きめ細かい履修指導や研究指導を行う。</li> <li>● 自動車に関わる高度で複雑な課題を理解し、解決するための基盤となる高度な専門知識が修得できるよう科目を編成・配置する。そのために、専門分野教育を下記の 5 つの分野で実施する。       <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 先端材料科学分野：次世代自動車に求められる各種先端材料の究明とともに、燃料電池、Li イオン 2 次電池やパワーデバイスの開発ができる人材の養成に必要な科目を配置する。</li> <li>(2) ダイナミクス分野：次世代エンジンの動力学特性の解明と開発、空力特性及び動力学特性に優れた信頼性の高い車体の構造の究明ができる人材の養成に必要な科目を配置する。</li> <li>(3) 情報制御学分野：車載制御システム、組込みハードウェアやソフトウェアの開発、ITS など先端的な自動車情報計測制御の研究開発ができる人材の養成に必要な科目を配置する。</li> <li>(4) 人間科学分野：車とヒトの交通心理学や安全文化の探求、さらに交通流及び交通情報の工学的解明ができる人材の養成に必要な科目を配置する。</li> <li>(5) 社会科学分野：産業の政策や法規、交通やエコロジーの経済などのマクロな課題と、戦略経営、イノベーションや生産のマネジメントなどの技術経営の解明ができる人材の養成に必要な科目を配置する。</li> </ol> </li> <li>● <u>自動車に関わる諸問題に対し、複眼的な視点や学際的なアプローチで取り組むことのできる能力を習得できるよう科目を編成・配置</u>する。そのために、<u>主専攻・副専攻制度を導入し、専門分野に隣接する分野の知識・思考・洞察力の育成を図る</u>。</li> <li>● 実践志向の新しい教育を提供する。そのために、本学のみならず、企業や他大学の専門家を加えた教育体制を構築するとともに、<u>長期インターンシップ</u>により自動車産業の現場で問題意識を磨き、実践を意識した学習・研究姿勢を醸成する。</li> <li>● グローバル化時代に対応した意思疎通能力を養うよう科目を編成・配置する。そのために、「<u>国際コミュニケーション演習</u>」などを通じて、<u>英語による研究発表及び質疑応答の能力を養う</u>。</li> </ul> <p>【博士課程】</p> <p>オートモーティブを出口として教育研究の焦点を定め、自立した研究者ないし専門家として、高度な専門知識や方法論を展開して、高度で複合的な課題に取り組むことので</p>

	<p>きる能力を身に付けられるよう教育課程を編成する。具体的には、下記の方針で教育課程の編成を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <u>出口（自動車）を意識して、高度な専門分野の知識や方法論を習得できるように科目を編成・配置</u>する。</li> <li>• 自立した研究者ないし専門家としての能力を習得できるようきめ細やかな研究指導を行う体制を整備する。</li> <li>• 自動車に関わる諸問題に対し、複眼的な視点や学際的なアプローチで取り組むことのできる能力を習得できるような研究指導体制を整備する。</li> <li>• グローバル化時代に対応して、国際的に研究成果を発信する能力を養うよう科目を編成・配置する。そのために、「<u>上級国際コミュニケーション演習</u>」などを通じて、<u>英語による研究発表及び質疑応答の能力を養う</u>。</li> </ul>
ライブラリーサイエンス専攻	<p>【修士課程】</p> <p>本専攻では以下の教育を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 情報の管理・提供に関する図書館情報学及び記録管理学・アーカイブズ学の教育</li> <li>• 情報の管理・提供を実現するための、データエンジニアリングを含む情報科学の教育</li> <li>• 人の知の創造・継承プロセスを把握するための理論や技能に関する教育</li> <li>• 電子媒体の情報も対象とした、情報法制の現状並びにその哲学に関する教育と情報流通制度に関する教育</li> <li>• これからの情報の管理・提供のあり方、知の創造・継承活動を支える「場」の新たな機能などについて探求する能力を身につけさせる教育</li> </ul> <p>入学生が文系・理系にまたがっていることを考慮し、これらの教育を実現するために、以下の方針で教育課程の編成及び科目の配置を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 情報の管理・提供に関する、<u>図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学、情報科学を柱として教育課程を編成し、関連分野として、学習やコミュニケーションに関する科目、情報法制に関する科目群を配置</u>する。</li> <li>• <u>図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学の教育においては、これらの基礎を学部教育で学んで来なかった学生のことも配慮するとともに、両学問分野を整理して一体的に教育する</u>。</li> <li>• <u>実践的な演習科目</u>及び特別研究において、これからの情報の管理・提供のあり方、知の創造・継承活動を支える「場」の新たな機能などについて探求する能力を身につけさせる教育を行う。</li> <li>• 図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学、情報科学の科目群に関しては、分野の特質に合わせて、基礎的内容の講義科目、発展的内容の講義科目、演習科目を、学生が効率的に習得できる順番で配置する。さらに、実践的な演習科目の実施に必要な知識を教授する科目が実践的演習が配置される学期の前に配置されるようにする。</li> <li>• 基礎をしっかり学ばせ、かつ、学生の多様なニーズに応えられるように、必修科目と選択科目を設定し、<u>多様な履修モデルを用意</u>する（学生は、履修モデルを基に指導教員の履修指導を受け履修計画を立てる）。</li> </ul> <p>【博士後期課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 研究の実施及び指導教員団とのディスカッションを通して、以下の能力を養う。       <ul style="list-style-type: none"> <li>- 独立した研究者としての基本的能力、</li> <li>- <u>主要3分野（図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学、情報科学）のうちで軸足を置く分野を掘り下げ、他の2分野の知見・研究成果を利用する能力、</u></li> <li>- 従来の枠組みに捕らわれることなく、<u>ユーザーの視点に立って、情報の管理・提供のより良い枠組みを探求する能力</u></li> </ul> </li> <li>• 軸足を置かない他の2分野の最新の研究動向（課題、考え方、技術・方法等）を理解し、知識の収集ができる能力、及び異分野の研究者と研究上のコミュニケーションができる能力を養成するための科目を配置する。</li> <li>• 入学者の背景に応じて、本専攻修士課程で開設されている授業科目を履修させることにより、不足する能力を養成する。</li> </ul>

## ○資料 24 カリキュラム・ポリシーを掲載した Web ページの URL

専攻	カリキュラム・ポリシーを掲載した Web ページの URL
ユーザー感性学専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/kansei/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/kansei/</a>
オートモーティブサイエンス専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/automotive/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/automotive/</a>
ライブラリーサイエンス専攻	<a href="http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/library/">http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/admission/policy/g-ifs/library/</a>
※ アドミッション・ポリシーの記述中に併記。 またライブラリーサイエンス専攻では、 <a href="http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/">http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/</a> に独自ホームページを持ち、そこにも記載している。	

## ○資料 25 教育目的とカリキュラム・ポリシーの関係において特筆すべき事項

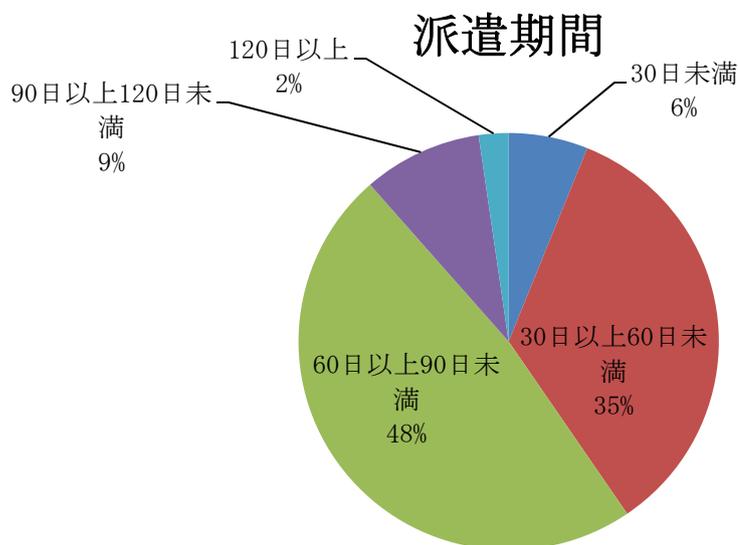
教育目的で掲げた人材を養成する（すなわち、ディプロマ・ポリシーで挙げた能力を身に付けさせる）ためには、課題解決に必要な多様な学問分野の知の教授と、課題の把握とその解決に取り組む実践的な教育が必要である。このため、各専攻のカリキュラムポリシーでは、以下のような工夫がなされている。

- 専攻が扱う課題に関連する多様な学問分野の科目を配置するとともに、修了後のキャリア像等を念頭に置いた多様な履修モデルを用意し、効果的な履修計画が立てられるようにしている。
- 主専攻・副専攻制（オートモーティブサイエンス専攻）や卒業要件、さらには指導教員による履修指導によって、自身の専門の科目だけでなく関連する科目の単位も履修するように工夫されている。これにより、学生は、隣接する分野の知識や考え方も学ぶことになる。
- 科学や社会が抱える複合的かつ根源的な課題を認識し、それに取り組む実践的な学習の場を提供する科目として、プロジェクトチームラーニング (PTL) とインターンシップ科目を設定。ユーザー感性学専攻とライブラリーサイエンス専攻では PTL とインターンシップの組み合わせ（選択必修）で実施し、オートモーティブサイエンス専攻は長期インターンシップ（必修）を実施。
  - PTL では、現場が抱える課題を対象に、チームで議論しながら、問題の把握、仮説の設定、解決策の考案と評価を行い、最終的にクライアント（ライブラリーサイエンス専攻の PTL の場合は仮想クライアント）へ提案を行う。科学や社会が抱える現実の課題に取り組む実践的な演習である。
  - インターンシップは単なる職場体験に留まるのではなく、専門的な知識の実践的な知識への変換、リーダーシップの習得、現場での課題の把握を目的に行われる実践的演習。事前指導、事後指導により、インターンシップの目的を周知し、成果を学内での学習、研究に繋がるように指導している。

## ○資料 26 オートモーティブサイエンス専攻のインターンシップ実施状況

平成 22 年度から平成 27 年度までに延べ 131 名の学生をインターンとして自動車関連企業に派遣。うち 78 名 (59.5%) は 60 日以上派遣された (8 名 (6%) の学生は派遣期間 30 日未満であったが、これは、受入企業の希望)。AMS 設立当初から派遣先企業の先端的テーマについて取り組んでいたが、近年ではさらにテーマの高度化が進んでいる。平成 27 年度には、22 名の派遣学生のうち 7 件で研究テーマ自体の公開が秘匿されるなど、派遣企業の最先端テーマに取り組んでいる。

派遣期間の分布 (131 名)



派遣企業数：21 社

JFE スチール株式会社、西日本高速道路株式会社、カルソニックカンセイ株式会社、キャッツ株式会社、ジャトコ株式会社、ダイハツ工業株式会社、ダイハツ九州株式会社、株式会社 デンソー、東レ株式会社、トヨタ自動車株式会社、トヨタ自動車九州株式会社、日産化学工業株式会社、日産自動車株式会社、日産自動車九州株式会社、一般財団法人 日本自動車研究所 (JARI)、日立オートモティブシステムズ株式会社、日本タングステン株式会社、ボッシュ株式会社、株式会社 本田技術研究所、マツダ株式会社、株式会社リコー

取り組んだテーマ (H27 からいくつか抜粋)

※ H27 年度は、非常に機密性の高い研究に取り組んだ例が多く、派遣 22 名中 7 件でテーマ自体の公開が秘匿扱いとなった。

- リチウムイオン電池用材料の特性検討 (リコー)
- 自動車用排気センサの基礎研究 (デンソー)
- 熱処理治具の耐久性向上 (ジャトコ)
- エンジンの熱解析 (マツダ)
- バンパー締結ツメ標準化に向けた 最適な荷重予測方法検討 (トヨタ自動車九州)
- 運転時の精神的負担感に関する研究 (デンソー)
- 米国向け輸出車種プロジェクトの生産準備活動 (日産自動車九州)

## ○資料 27 ユーザー感性学専攻の PTL の実施状況 (一部を抜粋)

年度	テーマ	連携組織	概要	参加学生数	参加教員数
H23	リハビリ病院の自由時間の過ごし方に関する研究プロジェクト	特定医療法人順和長尾病院	脳卒中入院患者の自由時間の過ごし方をタイムスタディにより調査した。	8	2
	INORI プロジェクト	障害福祉サービス事業所「工房まる」博多織織元「サマイ織物」	福祉と伝統工芸と環境保護をつなぎ、すべての存在を認め合う世界への祈りを込めた商品の開発	10	1
H23 ～ H26	子どもホスピスプロジェクト	医療法人 小さな診療所 マリンワールド 訪問看護ステーションいちばん星 ジャズ好きもの会 ワレワレワークス(マニシア氏)	子どもの病気やいのちについて考え、子どもホスピスが受け入れられる土壌をつくるためのアクションリサーチ	25 延べ	1
H24	事象関連電位による音評価	自動車メーカー	自動車のドアの開閉音から受ける印象を脳波を用いて検証した。	7	1
	焼酎文化のリ・デザイン提案	(株)ルネサンス・プロジェクト	「焼酎」の新しいありかたを先般焼酎ブームの仕掛け人である(株)ルネサンス・プロジェクトと共同で研究	7	1
H25 ～ H26	健康維持・増進を目的としたシリアスゲームの評価プロジェクト	本学芸術工学研究院	地域の在宅高齢者を対象にリハビリ訓練用に開発されたシリアスゲームの効果を科学的に検証した	17 延べ	2
H26	ミュージアム体験&ミュージアム・コミュニケーション	なし	本学総合研究博物館の資料・場・機能を活かし、子どもや親子をはじめ、地域の方々に、そこでしかできないミュージアム体験や学びを提供する	10	1(+3) ( )内は協力した博物館教員数
	「ソウルストリート春吉」の将来像をさぐる	春吉橋を核とした空間利用に関する技術研究会(主催:国土交通省福岡国道事務所。福岡市・福岡県も参加)	中洲・春吉橋をはさんだ国体道路沿いの街路としての可能性を探り、学生目線・留学生目線で「ソウルストリート春吉」の将来像を描く	9	1
H27	糸島ジモト学プロジェクト — 田舎暮らしの横糸・縦糸。新しい作法をつむぐ —	総務省、日本テレワーク協会、糸島市、西日本新聞	総務省「ふるさとテレワーク地域(糸島)実証事業」に参加し、地域社会と移住者の協働のありかたを探る	2	2

## ○資料 28 ライブラリーサイエンス専攻の PTL の実施状況 (全テーマ)

年度	テーマ	概要	参加学生数	参加教員数
H23	九州大学機関リポジトリ (QIR) 登録論文数増加に向けて	学術論文のオープンアクセスのための取組として、学術機関リポジトリの構築が進められている。本学を対象としてその現状を整理し、研究者への意識調査 (アンケート) を通して、登録論文数増加のための提言をした。	3	4
	学生協働の可能性 : 図書館入館者数 UP のために	学習の場である大学図書館の利用者数増加のためにどのようなことができるかについて、学生の視点から「学生協働」に焦点を当てた企画を提案した。	3	4
H24	九州大学附属図書館における留学生サービスの向上	国の政策により、今後大学で学ぶ留学生は確実に増加する。留学生の教育学習環境の整備の一環として、図書館の利用に関する留学生のニーズ調査を行い、改善法を提案した。	5	4
	公文書館の EAD 利用のためのマニュアルの提案	目録データの記述方式の標準規格として EAD があり、国立公文書館もその利用を推進している。しかし、現実には利用は進んでいない。そこで、EAD に係る現状の問題点を確認し、EAD 利用推進のために、そのマニュアル作成を検討した。	5	4
	古典籍データベースの記述と検索手段の比較検討に基づく提案	本学が所蔵する近世日本古典籍の画像データベース及び OPAC を対象に、他機関のデータベース等との比較検討から、書誌情報、画像の公開点数・表示のされ方、検索機能等について考察し、古典籍という資料の性格を捉えた上でのマルチレベル記述に基づく検索手段の構築を提言した。	5	4
H25	再利用を考慮した大学業務文書の管理法 —九州大学における文書管理の現状と課題—	公文書管理法の施行に伴い、国立大学法人には、国民に対する説明責任を果たす上で、法人の運営全般にわたって組織・業務・財務に関する情報をはじめとした幅広い情報の提供・公開が求められている。その際、根拠資料として、業務文書の再利用が重要になってくる。しかし、文書再利用に際し、目的とする資料の検索が困難な状況にあると予想され、学務系の職員を中心としたアンケート調査により、本学の文書管理の現状と課題を整理した。	4	5
	特定主題に関する情報の一元提供 —長崎「原爆」資料と山本作兵衛コレクションを題材として—	まず総合的な資料の情報提供が行われている事例として、Europeana・デジタル岡山大百科・信州デジくらの機能の分析を行った。次に総合的な情報提供が行われていない九州地区の事例として、長崎の「原爆」関係資料と世界記憶遺産となった山本作兵衛コレクションをとりあげた。これらについて現状やどのような情報提供のあり方が望ましいのか検討した。2つのケーススタディからデジタルコレクションを構築する際にどのような情報の提供が求められるかを考察した。	6	4
H26	各データベースの紹介とクロス表、Mind Map の改善案	学術論文を検索する際、各種のデータベースが利用できるが、それぞれどのような特色がありどのような論文の検索に向いているのかを調査報告した。また、本専攻の教員が開発した独自の検索ツールである「クロス表」「Mind Map」について紹介するとともに、その改善案を提案した。	3	5
	「クロス表」マニュアル作成	本専攻の教員が開発した学術論文の検索ツールである「クロス表」では、検索結果を、著者、出典、国、年代などから2つの軸を選んで表の形で提示し、その結果を受けて、利用者は検索クエリや表の軸を新たに選ぶという分析的な論	3	5

## 九州大学統合新領域学府 分析項目 I

		文検索を行う。本テーマでは、このツールのマニュアルを整備するとともに、その過程でツールの改良の可能性を探った。		
	目録作成における課題の抽出と解決案 ー九州大学文書館資料を事例としてー	現在、Web 上で公開されている目録の比較検討を行い、その上で実際に本学大学文書館が所蔵する文書群の目録を作成した。作成実務を行う中で生じる問題点を抽出し、その解決案を提案した。	3	4
H27	非専門家が活用可能な標本データベースの検討	昆虫学データベースやコケ類のデータベースのような標本データベースは本来専門家による利用を前提としたものであるが、使い方によっては非専門家の利用も考えられる。たとえば、コケ類のデータベースを小中学校の探究的な学習の時間に利用し、身の回りに生息しているコケの種類とその分布を調べることで、環境問題を意識させることができる。しかし、既存のデータベースはこのような学術名を知らない非専門家による検索を前提としていない。そこで、本テーマでは、非専門家が活用可能な標本データベース（特に検索機能）について検討した。	2	6
	新しい目録規則：RDA (Resource Description and Access) とはなにか	2010 年 6 月に刊行された、目録規則「RDA (Resource Description and Access)」についての紹介とその課題について整理し、今後の目録規則の方向性について考察した。	1	4

## 1-2-(1)-③ 教育課程の編成と教育科目の配置の状況

各専攻のカリキュラム・ポリシーで示した方針に従い、教育課程の編成と教育科目の配置を行っている（資料 29）。特に、修士課程の編成は以下のような特徴を持っている。

- ・ 専攻の教育の基礎となる科目、あるいは全体を俯瞰する概論を配置
- ・ PTL・インターンシップによる実践的な教育
- ・ 科目履修方法（ユーザー感性学専攻）、副専攻の認定（オートモーティブサイエンス専攻）履修指導（ライブラリーサイエンス専攻）により、多様な科目を履修することを促す
- ・ 分野の性質を考慮した科目配置（基礎から発展・演習へ、逆に、演習から基礎理論へ）

## ○資料 29 教育課程の編成と教育科目の配置の特徴

専攻	教育課程の編成の特徴
ユーザー感性学	<p>【修士課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 科目群の編成は以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 専攻を超えて統合新領域というフロンティアにおける最先端の研究を概観する「学府共通科目」（必修、1 科目）、</li> <li>- 修士論文指導を兼ねる「特別研究」（必修、2 科目）、<u>コース専任教員のオムニバス講義「ユーザー感性学基礎」、実践科目である「PTL・インターンシップ科目」</u>からなる「専攻共通科目」。「ユーザー感性学基礎」は 3 科目のうち 2 科目を必修とし、広領域であるユーザー感性学についての全体像をつかむ。「PTL・インターンシップ」から 2 科目を履修し、実践的な知の統合につて現場での学びをつかむ。</li> <li>- コースごとに開講される「コース専門科目」</li> </ul> </li> <li>・ 「コース専門科目」の内訳は以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>「感性科学コース科目」は、感性及び感情の研究を通して、価値基準の基盤となる感性の探求する専門科目と演習科目を配置している。</li> <li>「感性コミュニケーションコース科目」は、感性を基盤としたコミュニケーション力、共感力の育成をめざし、専門科目と演習科目を配置している。</li> <li>「感性価値クリエーションコース科目」としては、ユーザーの感性的な価値を抽出・形成・評価する手法と、一連の考察を統合するマネジメントに</li> </ul> </li> </ul>

	<p>ついて学ぶ科目を多彩に配置している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3コースとも、1年次に基礎的、包括的な科目を主として配置し、2年次に専門性の高い科目を配置し、段階的理解がしやすいように工夫している。なお、演習科目である「PTL・インターンシップ」は1年次から設定し、履修を勧めている。</li> <li><b>他コースの専門科目、他専攻・他学府の授業科目の履修を促す。</b> (参考：科目履修方法) 以下に挙げる単位を含む 36 単位以上を修得すること。       <ol style="list-style-type: none"> <li>①「学府共通科目」 1 科目 1 単位</li> <li>②「特別研究」 2 科目 6 単位</li> <li>③「ユーザー感性学基礎」 2 科目 4 単位</li> <li>④「PTL・インターンシップ」 2 科目 4 単位</li> <li>⑤自らが履修するコースの「コース専門科目」 5 科目 10 単位</li> <li>⑥次に掲げる科目 11 単位           <ol style="list-style-type: none"> <li>(a) ユーザー感性学専攻の授業科目 ただし③④⑤までの単位として修得した単位を除く</li> <li>(b) 本学府他専攻の授業科目</li> <li>(c) 他学府の授業科目</li> </ol>           ただし、(b)及び(c)の授業科目で課程修了の要件となる単位に含めることができるのは、6 単位までとする。         </li> </ol> </li> </ul> <p>【博士課程】 博士論文の研究指導を兼ねる「特別研究」を中心に、各コースの特論と実践科目として「上級 PTL 演習」(いずれも選択科目)の履修を勧めている。</p>
オートモーティブサイエンス	<p>【修士課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自動車<sup>1)</sup>を教育研究の出口として定め、当専攻の学生が共通して備えるべき<b>基礎的知識や能力を養う専攻共通科目と自動車科学に関わる各専門分野の科目</b>により教育課程を編成。</li> <li>科目群の編成は、以下のとおり。       <ul style="list-style-type: none"> <li>- 専攻を超えて統合新領域というフロンティアにおける最先端の研究を概観する「学府共通科目」(必修、1 科目)、</li> <li>- 当専攻の学生が共通して備えるべき知識や能力を養う「専攻共通科目」(必修、7 科目)、</li> <li>- 各分野の専門科目からなる「分野専門科目」(選択、57 科目)。</li> </ul> </li> <li>専攻共通科目では、自動車に関わる諸問題を俯瞰するため、日本を代表する<b>自動車メーカーから講師を招いて講義する「オートモーティブサイエンス概論」</b>を1年次の最初に必修として配置。1年目の後期に、必修科目であるインターンシップを配置し、現実の課題を修士論文研究に早期に反映できるように工夫。英語によるプレゼンテーション能力や意思疎通能力の涵養を図る<b>「国際コミュニケーション演習」</b>を2年にわたり各学期の後半に設置し、定期的に英語による研究発表の機会を設けるとともに、修士論文研究に段階的に取り組むための道標となるようにしている。</li> <li>分野専門科目については、分野ごとに主要課題や基盤的知識を教授する概論科目(例えば、「オートモーティブ先端材料科学概論」「オートモーティブダイナミクス概論」など5科目)を設置し、各専門分野の全体像をつかめるように工夫している。また、1年次後期はインターンシップのため、通常の講義は受講できないため、集中講義形式で科目配置することで、履修の機会を確保している。さらに、<b>自らの専門とする分野以外の分野専門科目を一定以上修了(3科目、6単位)した場合、修了証明書に「副専攻」の認定をすることで、視野の広い知識・能力の涵養を促進する</b>体制としている。</li> </ul> <p>【博士課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自動車科学及び自動車産業の現代的課題を<b>自動車メーカー経営陣クラスの講師が講義する「オートモーティブサイエンス特論」</b>、自らが独立して研究を行うための研究者に求められる一般的能力及びディプロマ・ポリシーで挙げたオートモーティブサイエンス研究に必要な能力(知識・理解、専門的能力、汎用的能力、態度・志向性)を身に付けさせることを目的に博士論文指導を行う「オートモーティブサイエンス特別研究」、さらに英語による意思疎通能力の涵養を図る<b>「上級国際コミュニケーション演習」</b>の3つの必修科目の他、2つの選択科目から構成される。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>「オートモーティブサイエンス特論」は、オートモーティブサイエンスの全体を展望し、学究活動のベクトルを定めるための科目であるため、進学時に短期集中で開講する。</li> </ul>
ライブラリーサイエンス	<p>【修士課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>科目群の編成は、以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>専攻を越えて統合新領域というフロンティアにおける最先端の研究を概観する「学府共通科目」（必修、1科目）、</li> <li>修士論文指導を兼ねる「特別研究」（必修、2科目）、</li> <li>本専攻での学習の基礎となる「<u>基礎科目</u>」（必修、5科目）</li> </ul> </li> </ul> <p><u>図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学に共通の、情報の管理・提供に関する基礎を統合的に教授する「情報マネジメント論」「情報サービス論」「情報システム論」、情報を求めるユーザーをガイドできる能力の基盤知識を与える「学習科学」、情報の管理・提供に関する法制度や法政策を教授する「情報法制論」、</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>情報の管理・提供の現場における課題の認識と課題解決に向けた考え方、チームとして課題解決に取り組む際のコミュニケーション能力を養う<u>実習・演習科目である「PTL・インターンシップ科目」</u>（選択必修、3科目）、</li> <li>学生の多様なニーズに応えるための、<u>図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学、情報科学を中心としたより専門的な講義・演習科目である「専門科目」</u>（選択、23科目）から成る。<u>履修モデルと履修指導により、関連分野の科目を受講するように促す。</u></li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>基礎科目は1年次に配置し、このうち、情報の管理・提供に関する基礎を教授する3科目は前期に配置することで、1年次の夏季休暇中でのインターンシップの受講を可能とする。</li> <li>専門科目のうち、図書館情報学、記録管理学・アーカイブズ学における、マネジメント、政策、資料、サービスに関わる専門科目を1年次に配置し、特別な能力の養成を主眼とする科目、発展的な内容の科目である活動論や資料演習などの専門科目を2年次前期に配置する。</li> <li>情報科学に関する専門科目は、人文系の出身者にも学習しやすいように、まず簡単な演習を通して体験により理解を促し、科目の特性に応じて理論的ベースを教授し、発展的なものへ進むように配置する。</li> </ul> <p>【博士後期課程】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究の実施及び指導教員とのディスカッションを行う（博士論文研究の指導を兼ねる）「ライブラリーサイエンス特別研究」（12単位、1～3通年）、<u>専任教員が自らの専門に関わる最新の研究事例を紹介し学生とともに議論する「ライブラリーサイエンス特論」、研究の進捗状況を報告し指導教員以外も討論に参加する「プレゼンテーション演習」</u>から構成される。</li> <li>「ライブラリーサイエンス特論」は、ある程度自身の研究を進め、課題解決のために何が問題でどこに困難があるかなどを把握した後に行うのが効果的であると考えられるため、2年次前期に集中講義として配置する。</li> <li>「プレゼンテーション演習」は指導教員以外の専任教員への研究の進捗状況の報告も兼ねるため、1、2年次に4回定期的に集中講義として配置する。</li> </ul>

## 1-2-(1)-④ 授業内容及び授業時間割

本学府の特筆すべき授業内容は、実践的な教育を意図した演習科目（PTL、インターンシップ）であり、また、時間割上の工夫として、キャンパス間移動の負荷の軽減のための工夫、集中講義による開講、フレキシブルな時間割設定、特定曜日への必修科目の配置などを行っている（資料30）。

## ○資料 30 授業内容及び授業時間割の特徴

授業内容の特徴	<p>実践的な演習科目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- ユーザー感性学専攻における PTL では、製造メーカにおける未来の生活を予測した製品企画開発プロジェクトや市町村など行政との共同によるまちづくりプロジェクト、地域産業活性化のためのプロジェクトなど、社会に還元できる実践的な教育を進めている。</li> <li>- オートモーティブサイエンス専攻におけるインターンシップは、1～4ヶ月に及ぶ長期インターンシップを義務づけるなど、学での学びを産に活かす、逆に産の知恵を学の研究に加えるなど、より実践的な大学院教育につながっている。</li> </ul> <p>ライブラリーサイエンス専攻のインターンシップは、図書館、レコードマネージメントを業務とする企業、文書館など、情報の管理・提供のための組織で行い、現場における課題の発見といった実践的な教育になるよう工夫されている。また、高度情報化社会における情報の管理・提供に関する課題や図書館の教育学習環境における課題を扱う PTL I、文献や文書・記録といった資料の性格による垣根を取り払い、情報を総合的に管理・利用するための方法論構築に取り組む PTL II により、学生が主体的に課題設定を行う実践的な演習を行っている。</p>
時間割の工夫	<p>文理横断型の学府であるために、専任の教員は様々な研究院等から配置されている。そのため学生の移動の負担を軽減するために、遠隔授業を採用するなどの時間割の工夫が行われている。この他の専攻個別の時間割の工夫は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ユーザー感性学専攻は、複数（2箇所）のキャンパスで授業が行われるため、学生のキャンパス間移動の負荷が大きい。それをなるべく軽減するために、副キャンパスでの授業を特定の曜日に固めて開講している。</li> <li>・オートモーティブサイエンス専攻では、主専攻／副専攻制を導入しているため、時間割作成では、近接する分野の科目が同じ時限に重ならないように配慮するとともに、講義が複数キャンパスで行われるため、学生の移動時間も考慮して、時間割を作成している。また、一年目後期のインターンシップが大きな比重を占めることから、分野専門科目を集中講義により開講し、学生が履修しやすい時間割としている。</li> </ul> <p>ライブラリーサイエンス専攻では社会人への対応として、必修科目を特定の曜日に集中させる（公共図書館が閉館となる月曜日を想定）、他の受講生と相談の上6時限目以降に配置するなどの対応も行っている。さらに、夏季休暇中の集中講義、Web 学習システムの活用など、社会人が受講しやすい形態の講義も用意している。</p>

## 1-2-(2) 社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

本学府では、アンケート等の意見聴取により、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等の把握に努め、それらに応じた教育課程の編成又は授業科目の内容を整備している。

特に、プロジェクトチームラーニング (PTL) 及びインターンシップは実践を通して様々な知識や経験を見に付けたいという学生のニーズを満たしている。平成 26 年度のオートモーティブサイエンス専攻でインターンシップ後に行われたアンケートでは、回答者 19 名中、14 名が非常に満足、4 名が満足と回答しており、自由形式の回答からも大きな成果を上げていることが分かる。ユーザー感性学専攻では、子供がユーザーとなる医療・教育・文化施設などで活躍する人材育成のためのプログラムを平成 23 年度より開始し、これまでに 20 名の修了者を出している。また PTL がきっかけとなり社会的課題に取り組む NPO 法人等を設立した学生も輩出している。さらに、ライブラリーサイエンス専攻では、「日本アーカイブズ学会登録アーキビスト」資格認定制度へ対応するため、平成 25 年度からカリキュラムを一部改定した（資料 31）。

## ○資料 31 学生のニーズ等に応じた教育課程の編成の具体例

授業科目への学術の発展動向（担当教員の研究成果を含む）の反映	学術の発展動向を踏まえ、最新の研究成果も講義の内容に反映している。
外国語による授業の実施	オートモーティブサイエンス専攻では、外国語（英語）による授業としては、通常の授業のいくつかとグローバルコース向けの授業で開講している。
他研究科の授業科目の履修	本学他学府（他研究科）の授業が履修可能である（オートモーティブサイエンス専攻、ライブラリーサイエンス専攻では、4単位まで、ユーザー感性学専攻では6単位まで修了要件の単位として認定）。
他大学院との単位互換	平成 24 年度からは他大学大学院との単位互換が、西部地区 5 大学連携（本学、西南学院大学、中村学園大学、福岡大学、福岡歯科大学）により可能である。（ライブラリーサイエンス専攻は平成 25 年度に提供）
秋期入学への配慮	入学状況、専攻内容などに応じて個別指導や授業科目を配慮し、体系的な教育を効率的に行うよう個別に対応している（ライブラリーサイエンス専攻は秋期入学は実施していない）。
インターンシップによる単位認定	<p>3 専攻とも、インターンシップによる単位認定を実施している。<u>インターンシップを通して、社会が現実には抱える課題を把握し、その解決に取り組むことで、社会からの要請を把握し、また学生が修了後に、それらの要請に応える能力を身につける助けとなる。本学府のインターンシップは、実践を通して様々な知識や経験を身につけたいという学生の多様なニーズを満たしている</u>と評価できる。</p> <p>オートモーティブサイエンス専攻では、平成 22 年度には 23 名、23 年度には 19 名、24 年度には 21 名、25 年度には 23 名、26 年度には 19 名の学生を長期インターンシップに送り出してきた。平成 26 年度の事後アンケートでは、回答者 19 名中、14 名（73.7%）が非常に満足、4 名（21.1%）が満足と回答している。<u>同アンケートの自由形式の回答では、「テクニカルな部分に加え、社会人としての心構えなど自分に足りない部分を学ぶことができた」、「必ずしも自分の得意分野を活かすだけが会社の仕事ではないことを学んだ」、「全ての設計開発の根本に顧客満足があることを学んだ」、「自分が行っている研究分野が実際にどのように使われているのかを知ることができた」などの声があり、大学での学習・研究と社会とのつながりを身をもって認識する上で大きな成果を上げている。</u></p>
その他	<p>ユーザー感性学専攻では地域や社会と連携した教育や、社会人向けの教育コースとして、平成 23 年度より「<u>チャイルドライフコミュニケーター</u>」プログラムをスタートさせている。病院、博物館、チルドレンミュージアム等、<u>子どもがユーザーとなる医療・教育・文化施設などで活躍する人材育成のためのプログラム</u>である。これまで 20 名の学生（うち社会人学生 7 名）が受講し、修了証を受領している。これらの学生のなかには現在、熊本大学病院・福岡大学病院の臨床現場で、専門知識をいかし、子ども介護のプロとして活躍している者がいる。また、PTL で社会的課題に直面したことがきっかけで、<u>これまで二人の学生が修了後にそれぞれ、重い病気や障害のある人や家族にケアサービスを提供する「認定 NPO 法人ニコちゃんの会」と、運動不足を自覚している勤労者を対象とした出前型の運動実施サポートを行う「一般社団法人 10 分ランチフィットネス協会」を設立し、社会や地域の課題解決にあたっている。</u></p> <p>ライブラリーサイエンス専攻では、平成 24 年から始まった<u>日本アーカイブズ学会の「登録アーキビスト」資格認定制度</u>へ対応するため、カリキュラムを一部改定し、「<u>情報資源保存論</u>」を専門科目に加え、平成 25 年度から実施している。</p>

## 1-2-(3) 養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

実質的な集団指導体制（資料 32）による多様な分野・観点からの指導、演習を重視したカリキュラム（資料 33）、PTL・インターンシップによる実践的教育（資料 34）により、教育目的で挙げた人材を養成することを可能としている。

## ○資料 32 指導体制

3専攻とも、主指導教員は学生の関心や研究テーマに対応できる教員がなり、主指導教員は修士論文・博士論文の研究指導の他、履修指導も行う。履修指導では、学生が目指す人材に必要な多様な分野の知識・能力が獲得できるよう指導している。

副指導教員制度がある専攻とない専攻があるが、副指導教員制度がない専攻でも各種の演習で実質的に専門が異なる教員からの指導も受け、学際的な観点から修士論文、博士論文の研究に取り組める体制となっている。つまり、**実質的な集団指導体制により、多様な分野・観点から研究指導が行われている。**

## ○資料 33 学府教育科目における教育課程の中での授業形態別開講数

講義	演習	実習	その他
125	54	21	1 (学府共通科目)

## ○資料 34 教育効果を高めるための工夫の具体例

フィールド型授業	ユーザー感性学専攻とライブラリーサイエンス専攻で実施されているプロジェクトチームラーニング (PTL) では、「感性価値」、「情報の管理・提供」にかかわる現場の課題を学生自身が設定し、チームで議論しながら、フィールド調査等も実施しつつ、問題の把握、仮説の設定、解決策の考案と評価等を行い、最終的にはクライアント (ライブラリーサイエンス専攻の場合は仮想クライアント) へ提案するという、実践的な演習を行っている。
長期インターンシップ	オートモーティブサイエンス専攻では、1～4ヶ月という非常に長期のインターンシップを必修科目としている。長期であるため、単なる職場研修ではなく、大学での学習・研究と社会とのつながりを認識し、さらに、現場での課題の把握や解決に向けた実践を行うことができる。インターンシップを効果的に実施するため、事前に学生、受入企業双方とのマッチング、終了後には、学生、企業双方の実施評価、成果発表会を実施している。

## 1-2-(4) 学生の主体的な学習を促すための取組

プロジェクトチームラーニング (PTL)、インターンシップにおいて、学生は必然的に主体的に行動することとなる。また、これ以外にも、ライブラリーサイエンス専攻の「レファレンスサービス論」(講義科目)のように実践的な課題を出すことにより興味を持って課題に取り組ませ、主体的な学習を促進する工夫、Web 学習システムを利用した情報交換の工夫等も行われている (資料 35)。

## ○資料 35 学生の主体的な学習を促し十分かつ必要な学習時間を確保するための工夫

専攻	具体例	
ユーザー感性学専攻	実践的教育による主体的学習の促進	フィールド型授業であるプロジェクトチームラーニング (PTL) において、現場が抱える課題を対象に、チームで議論しながら、問題の把握、仮説設定、解決策の考案と評価を学生が主体的に行うようにしている。PTL の成果のなかには、まちづくり MAP や外国人旅行者のための MAP、伝統工芸と福祉アートのコラボ商品など、今も社会の現場で実際に使われているものが多数あり、主体的に取り組むインセンティブを学生に与えている。また、インターンシップでは、「研究企画型インターンシップ」というものを設定し、学生が自分で立てた研究企画案を受入先企業に提案し、インターンシップに主体的・自立的に取り組むことを推奨している。
オートモーティブサイエンス専攻	実践的教育による主体的学習の促進	インターンシップにおいて、受入企業の指導者の支援を受けつつも、指導教員から離れ、学生は独自にインターン中の研究計画を立案し、計画し、実行する経験を積んでいる。
ライブラリーサイエンス専攻	シラバスを利用した準備学習の指示	「レファレンスサービス論」において、図書館業務で用いられている主題ガイド作成ツール LibGuides を使ったパスファインダー (図書館における個別のテーマに関する文献の調べ方ガイド) 作成実習を実施し、学生に各自の設定したテーマに沿ったガイドを作成させ、成果発表では図書館員を交えて意見交換を行うなど、授業時間外の

		主体的な学習を促進している。
	実践的教育による主体的学習の促進	プロジェクトチームラーニング (PTL) では、学生はチームでの議論を通してチームが取組む課題を主体的に設定し、指導教員団からのアドバイスは受けるものの、解決に向けた取組はチームで討論して主体的に進めて行く。社会人学生もいることから、授業時間外での学生同士の情報交換や相談等は対面では十分に行えないため、Web学習システムを利用した情報交換ができる環境を整えている。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

#### 体系的な教育課程の編成状況 (1-2-(1)) について

教育目的に則して、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが作成されている。教育課程は、教育目的を達成するために必要な、多様な学問分野の知の教授と、課題を把握し解決に取組む実践的な教育を実施できる編成となっている。

#### 社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫 (1-2-(2)) について

インターンシップは実践指向の学生のニーズを満たしており、事後のアンケート調査における評価も非常に高く、また、PTL は必然的に社会のニーズ汲み取った生きた学習となっている。

#### 養成しようとする人材に応じた効果的な教育方法の工夫 (1-2-(4)) について

実質的な集団指導体制による多様な分野・観点からの指導、PTL・インターンシップによる実践的教育といった工夫をしている。

#### 学生の主体的な学習を促すための取組

PTL、インターンシップを始めとする実践型の演習、実践を意識した講義の課題等により主体的な学習を促進しており、大きな効果を収めている。

以上の教育課程編、教育方法等の工夫が機能し、大きな成果を上げていると考えられることから、前述の想定する関係者の期待を上回ると判断される。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

## 観点2-1 学業の成果

(観点に係る状況)

## 2-1-1 在学中や卒業・修了時の状況

## 2-1-1-① 履修・修了状況から判断される学習成果の状況

修了者の課程修了時点の単位修得率は90%～96%で推移しており（資料36）、良好である。また、自身の専門の科目だけでなく、関連する科目の単位も修得しており（資料37）、本学府の教育目的に則している。

## ○資料36 平均単位修得率 (%)

平成22年度入学	平成23年度入学	平成24年度入学	平成25年度入学	平成26年度入学
90.0	95.5	94.8	91.8	96.6

備考：平成26年度までの学生の成績情報（学務情報システム）から次の定義で、各学生の単位取得率を算出。さらに、学部及び大学院ごとに全学生の単位取得率の平均をとり、その値を平均単位取得率とした。（出典：学務情報システム）

$$\begin{aligned} \text{単位修得率} &= (\text{取得した単位数}) / (\text{履修登録した授業の総単位数}) \times 100 \quad (\text{値は}\%) \\ \text{平均単位修得率} &= (\text{全学生の単位取得率の総和}) / (\text{学生数}) \end{aligned}$$

## ○資料37 関連する他分野の科目の単位修得状況

専攻	履修状況
ユーザー感性学	「ユーザー感性学基礎」、「PTL・インターンシップ」、自コースの「コース専門科目」（5科目10単位）の他に、専攻の授業科目、他専攻、他学府の授業科目を11単位以上履修することが修了要件となっている。H26年度修了生については、この11単位以上のうち、自コースの「コース専門科目」を除く、他コースの専門科目、他専攻・他学府の授業科目を、平均4.2科目（8.4単位）習得している。
オートモーティブサイエンス	グローバルコース以外の学生は、選択した副専攻の科目を3科目6単位以上修得した場合、修了時に副専攻が認定される。平成22年度～平成26年度の修了者108名の内、副専攻を習得している者は69名で、副専攻習得率は64%である。
ライブラリーサイエンス	専門科目は選択科目であり、大きく、図書館情報学系、記録管理学・アーカイブズ学系、情報科学系、その他（情報法制や著作権、電子資料作成などに関する科目）の4分野に分かれる。平成25年度及び26年度の修了生18人中9人が4分野のうち3分野以上で3科目以上修得しており、自身の専門だけでなく関連する他分野の科目を履修していることが分かる。

## 2-1-1-② 学生が受けた様々な賞の状況から判断される学習成果の状況

## 1) 在学生の論文発表、受賞及び研究助成金の獲得状況

在学生は意欲的に論文投稿、口頭発表をしていることが分かる（資料38）。また、国内外の会議等で学生が受賞しており（資料39）、教育成果を示すものである。さらに、研究助成金の獲得にも意欲的である（資料40）。獲得した助成金の課題は、いずれも社会の課題解決に学生の視点でアプローチしていくものであり、本学府の教育目的に則しており、これも教育の成果と言える。

## ○資料 38 在学生の論文発表状況

年度	論文（査読有）		口頭発表（査読有）	
	国際	国内	国際	国内
平成 22 年度	6	3	4	4
平成 23 年度	12	4	3	1
平成 24 年度	12	6	2	3
平成 25 年度	14	9	3	3
平成 26 年度	15	1	4	1
平成 27 年度	10	7	16	19

## ○資料 39 国際・国内学会等での学生の受賞

年度	学生の各種コンペティション等における受賞数
平成 22 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表奨励賞（日本生理人類学会第 62 回大会）3 件 全国規模の国内大会で、若手研究者および学生の発表者の中から優秀な発表に賞が与えられた。</li> </ul>
平成 23 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>issue+design competition2011 地域、日本、世界が抱える社会課題（ISSUE）を、創造力（DESIGN）で解決したアイデアに対して与えられる賞であり、産業の衰退、自然災害、医療・福祉問題、子育て・教育問題など日本の各地域に存在する市民の「安心」と「幸福」を脅かす社会的課題（ISSUE）の本質を捉え、調和と秩序をもたらすために、美と共感により、人心や社会に幸せなムーブメントを起こす産学官連携型ソーシャルデザインプロジェクトの実践的アイデアに対する賞。</li> <li>Poster Award (18th International Conference on Solid State Ionics Warsaw) 2 年に 1 回開催される固体イオニクス分野最大の国際学会、600 件のポスター発表から選出される 10 件の一つ。</li> <li>Dr. Bernard S. Baker Student Award for Fuel Cell Research (2011 Fuel Cell Seminar &amp; Exposition) 米国 Fuel Cell Seminar での学生発表のうち 5 名のみが選出。</li> <li>ECS 2011 Summer Fellowship (The Electrochemical Society) 米国電気化学会の 30 歳以下の優秀な若手が数名選ばれる権威ある賞。</li> </ul>
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>issue+design competition2012</li> <li>ESS2012 優秀論文賞</li> <li>触媒学会学会賞（技術部門） 毎年 2 回社会人会員に対して与えられる賞。実際の商業化の実績が必要とされる。</li> <li>日本機械学会 若手優秀講演フェロー賞 日本最大の工学系学会での講演に対して贈られた賞。</li> </ul>
平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>The 21st JPKR: Poster Award 日本化学会九州支部と韓国化学会釜山支部の合同セミナーでの受賞</li> <li>Excellent Paper Award of Symposium (12th IUMRS International Conference on Advanced Materials)</li> <li>第 3 回 CSJ 化学フェスタ 2013 優秀ポスター賞 日本化学会が毎年主催する研究発表大会での受賞。</li> <li>第 56 回放射線化学討論会優秀ポスター賞</li> <li>トムソンロイター社論文被引用回数ランキング・トップ 1% 認定 オートモーティブサイエンス専攻の博士課程在籍中に筆頭著者として発表した論文が、当該専門分野での論文被引用回数ランキング（2004 年～2013 年）で上位 0.24% を記録。</li> </ul>
平成 26 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本機械学会講演会 優秀講演賞 日本最大の工学系学会の九州支部講演会で 100 件以上の講演の中から受賞。</li> <li>学生ビジネスプランコンテスト努力賞 （一財）学習サポートセンターが主催するコンテストでの受賞。提案内容は平成 27 年に特許取得。</li> </ul>
平成 27 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本交通心理学会 優秀発表論文賞 交通心理学の分野で日本を代表する学会。本賞の選出は、年に 1、2 件。</li> <li>繊維学会年次大会 若手優秀発表賞</li> </ul>

## 九州大学統合新領域学府 分析項目Ⅱ

	<p>繊維に関する日本最大の学会で、若手優秀発表賞は非常に狭き門。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Best Student Poster Award (第12回国際生理人類学会議) 2年に1度開催される国際会議で、学生のポスター発表の中から優秀な発表に賞が与えられた。</li> <li>• Best Oral Presentation Award (The International Conference on Emotion and Sensibility 2015) 2015年度より結成された国際会議で(2年に1回開催)、若手研究者や学生の口頭発表の中から優秀な発表に賞が与えられた。</li> </ul>
--	--

## ○資料 40 研究助成金の獲得状況

九州大学 C&C プロジェクト	
年度	助成テーマ
平成 22 年度	子どもとミラーニューロンに着目した次世代ロボットのデザイン 子ども未来プロジェクト 組込み技術者へのプロジェクトマネジメントツール開発―「日本のモノづくり神話」崩壊への対策
平成 23 年度	UNDERWATER SOUND PROJECT
平成 24 年度	私からプロジェクト 化粧品の持続型循環デザイン提案・商品化に向けて “RE COSME PROJECT”
<p>※チャレンジ&amp;クリエイション (C&amp;C) は、本学に在籍する院生や学生が自ら企画するユニークな研究・調査プロジェクトについて、助成、実行のサポートする全学事業で、平成9年よりスタートし、本学の独自性を示す象徴的なプロジェクトである。院生・学生自らが若者らしい感性に基づくユニークな研究・調査プロジェクトを企画・計画し、自らが実践することで創造性発揮の喜びを知る機会を提供している。</p>	
九州大学基金「学生の独創的研究活動支援」	
年度	助成テーマ
平成 25 年度	<p>中小規模の災害対応支援プロジェクトの活動過程に対する体系的な記録手法の開発 ― 七ヶ浜復興支援ボランティアセンターを事例として ―</p> <p>【概要】災害対応記録は、災害対応で得た経験・知識を後世に継承するために有効な手段である。しかし、中小規模の災害対応支援プロジェクトは、財的・人的リソースが不足しているため、災害対応記録を残しにくい傾向にある。本研究では、七ヶ浜町復興支援ボランティアセンターを事例に、中小規模災害対応支援プロジェクトの災害対応記録作成の手法を提案する。</p>
<p>※本学基金は、本学百周年記念事業の一環で創設されたもので、奨学制度の充実、教育研究活動の支援等に当てられている。「学生の独創的研究活動支援」は学生・研究生が自ら企画した独創的な活動に対する活動費の支援である。</p>	

## 2) 本学府での教育が活かされた研究事例

資料 41 の事例が示すように、集団指導体制、PTL・インターンシップによる実践的教育、多様な分野の知見の教授といった本学府の教育体制、教育課程の編成が効果的に機能して学生の研究が進められている。

## ○資料 41 教育が活かされた研究事例

専攻	事例
ユーザー感性学専攻	<p>(事例 1) 研究企画型インターンシップ (資料 35 参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 感性価値クリエーションコースの学生 (平成 24 年度)</li> <li>• 受入先: 富士通(株) デザイン部</li> <li>• 企画提案テーマ: ICTシステム製品及びサービスのデザイン</li> <li>• クライアントの評価 (コメント): かなり難解なテーマについての対話を通し、時に頑固に時に素直に、そして最後まで悩みながら、自分の学んできた内容を納得のいく形で提案とし</li> </ul>

	て昇華させていたことは、私たちにとっても刺激となりました。
オートモーティブサイエンス専攻	<p>(事例1) 平成22年のインターンシップで、本専攻学生が自動車工場の塗装工程に関する改善案を提案。約2000万円のコスト低減につながり大きな成果を上げた。</p> <p>(事例2) 本専攻の学生が所属する研究室と共同研究を行っていた企業に、インターンシップで派遣され、共同研究を継続し、特許の取得に至った。</p>
ライブラリーサイエンス専攻	<p>(事例1) 日本製品に対する中国消費者の要望の増加に着目し、日中間でのネットショッピングにおける情報流通を、中国の消費者、代購業者、日本の業者の3者モデルで捉え、その間の商品流通過程と情報流通という二つの観点で捉えたクロス表を独自に考案し分析することで、問題点を明かにした。修士論文の成果は、国際会議の論文として採択された。 研究を進める上での、資料調査、アンケート実施及び結果の分析手法は、PTL1等の科目により身につけ、主・副の二名の指導教員からの異なる観点でのアドバイスで多様な発想を身につけた。既存の分野分類に収まらない課題なので、どのようにまとめさせるか困難だったが、主・副の指導教員の間でも議論することができ、指導体制の有用性が確認できた。また、正解がない問題分析のための議論のやり方は、PTLでの体験が有効であった。</p> <p>(事例2) この学生は、図書館情報学における文献情報の分析について、文献の評価に取り組んでいる。まず各種の指標の基本的調査を行い、文献検索システムにより実際の事例分析に取り組んだ。文献調査を行う研究者の視点に立ち、キーワードによる検索と引用情報という二つの評価の影響を分析した。内容での制約を付けた論文母集団での引用数による評価と、その制約がない状況での引用数の比較という具体的な課題を設定することで、新しい評価指標を考案し有用性を評価している。その結果は、二つの国際会議の論文として採択されている。 文献検索は、PTLで取り上げた課題でもあったが、この学生は、PTLを通じ、独自の課題を見出している。</p> <p>(事例3) 高度情報化社会における公文書管理の変容について、コンティニューム理論に準拠しながら、新たな公共性という観点から論じた修士論文を完成させた。研究に当たっては、従来の図書館学、アーカイブズ学の枠組みには収まらない情報社会論として、ライブラリーサイエンス専攻の複合的な教育の特性が活かされた。修了後は、九州大学文書館のテクニカルスタッフとして活躍したのち、現在は学習院大学大学院アーカイブズ専攻の助教を務めている。</p> <p>(事例4) PTL1でテーマとしたEDAに興味を持った。本来はアーカイブズ資料記述の符号化のために開発されたEADについて、合衆国における使用のあり方を検討しながら、海外ではむしろ図書館において活用されている状況を浮き彫りにした修士論文を完成させた。この論文では、電子環境のもとでは、情報資源の性格に関わらず、統合的なメタ情報管理が進んでいる背景を具体的に論じており、研究に当たっては、ライブラリーサイエンスの複合的な教育の特性が活かされた。</p>

## 3) その他学生の活動状況

社会の課題に密着した実践的な学問をめざす統合新領域学府にふさわしく、学生の活動は学内での研究に留まらず、社会や地域と連携した取組を幅広く行っており、マスコミなどで取り上げられる機会も多い(資料42)。

## ○資料42 その他学生の活動実績等(マスコミ等で取り上げられた事例等)

年度	新聞社	記事
平成22年度	読売、西日本	「子どもホスピス」つくろう 九大院生らチーム結成
	西日本	米焼酎 若者に売り込め CMや戦略プラン九大院生提案
	読売、朝日	くらし 子どもホスピスを作ろう 九大生らフォーラム

## 九州大学統合新領域学府 分析項目Ⅱ

平成 23 年度	西日本	医療者でなく院生たちで子どもホスピス九大大学院
	西日本	土曜エッセー 芸術養生－「連」に学ぶ、風土とアートの響きあい（修了生）
平成 24 年度	西日本、佐賀、熊本日日、読売	不要の化粧品 画材に再利用 社会貢献ビジネスに
	日経	自動車生産、「手足」から「頭脳」へ、開発も九州発目指す
平成 25 年度	読売	発見の楽しさ共有したい 子供向け科学イベントや野外学習会を開催 チャイルドサイエンスコミュニケーター
平成 26 年度	西日本	水素エネルギーに熱視線 産学官組織がセミナー
平成 27 年度	西日本	親富孝活性化へ学生夏祭り

## 2-1-(1)-③ 分析のまとめ

単位修得率は高く、修得した科目も、多様な分野の科目に跨っており、学府の教育理念に則している。在学中の研究では、本学府の教育に対する取組が効果的に機能して学生の研究が進められている。

在学学生は意欲的に論文投稿、口頭発表をしており、国内外の会議等で受賞している。研究助成金の獲得にも意欲的であり、獲得した助成金の課題は、社会の課題解決を目指すものである。また、社会や地域と連携した取組を幅広く行い、マスコミにも取り上げられている。これらは、「科学や社会の複合的な課題を解決する人材の養成」という本学府の教育目的が十分に達成されていることを示している。

## 2-1-(2) 在学中や卒業・修了時の状況から判断される学業の成果を把握するための取組とその分析結果

## 2-1-(2)-① 学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

## 1) 全学共通フォーマットによる Web アンケート調査

平成 25 年度に実施した全学共通フォーマットによる Web アンケート調査では、ほとんどの項目で、70%の学生が向上または少し向上と回答している（資料 43）。ただし、英語の運用能力と国際的に物事を考える力については向上を自覚している者は約 50%と低かった。このため、英語による研究発表を課す、国際会議での発表を推奨するなどの取組をした。その結果、平成 27 年度に実施したアンケート調査では、英語能力に関しては約 6%、国際的に物事を考える力については、約 18%向上を自覚している者の割合が増加している（資料 44）。

学府の教育目的の達成度については、約 70%以上が、達成または概ね達成と回答している。また、約 70%以上が大学院での教育・研究等に、満足、または、どちらかと言えば満足と回答している。これらことから、十分な学習環境・指導を提供できたと考えられる。

○資料 43 平成 25 年度実施の全学共通フォーマットによる学習の達成度・満足度に関するアンケート調査の結果

## 調査概要

## ■ 調査対象

本学府の他、システム情報科学府、システム生命科学府、人文科学府、人間環境学府、理学府、生物資源環境科学府、経済学府、芸術工学府、薬学府が参加。

統合新領域学府では、オートモーティブサイエンス専攻 M1、ユーザー感性学専攻 M1 M2 が Web 形式で実施し、ライブラリーサイエンス専攻 M1 M2 は同じアンケートを独自で配布・回収。

対象者 128 人、回答者 69 人、回答率 54%。

■ 実施期間

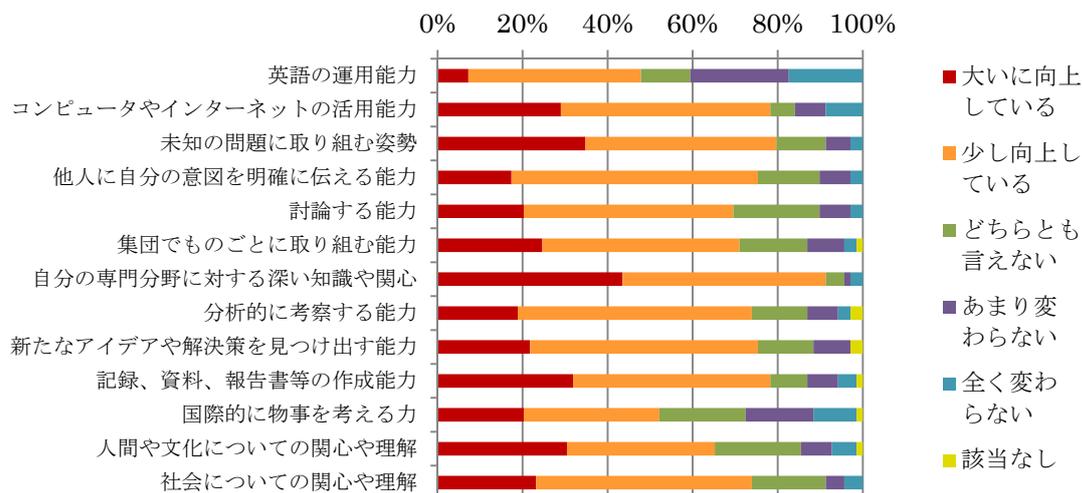
ライブラリーサイエンス専攻は、平成 25 年 7 月 25 日～8 月 1 日で実施。他の 2 専攻は、平成 25 年 10 月 11 日から 11 月 21 日で実施。

■ 調査項目

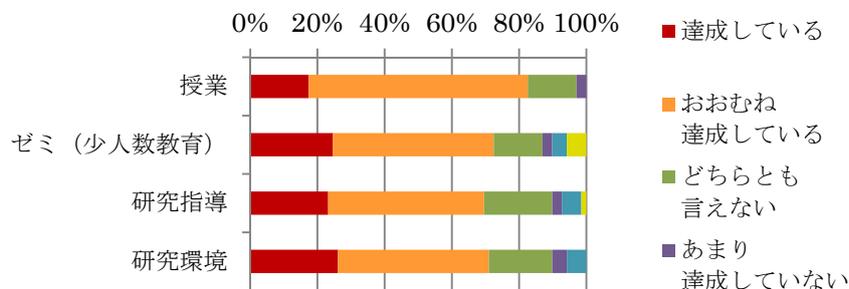
重点をおいている経験、能力や知識の向上度、教育課程・経験の達成度及び満足度、影響を与える教員との出会い、一週間当たりの活動時間、施設及び設備の利用度と満足度、学修・生活支援の利用度と満足度、教育目的等の認知度。

調査結果

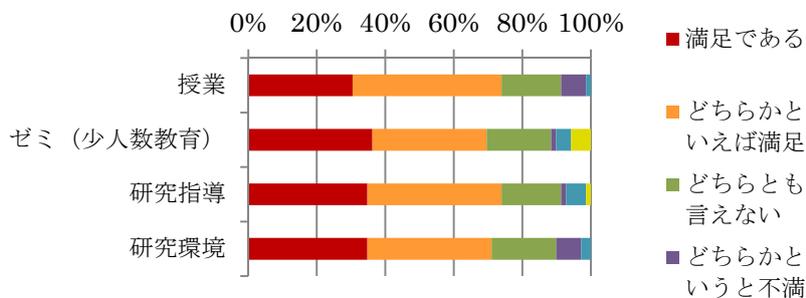
問 1 「大学院入学時に比べ能力は向上したか」



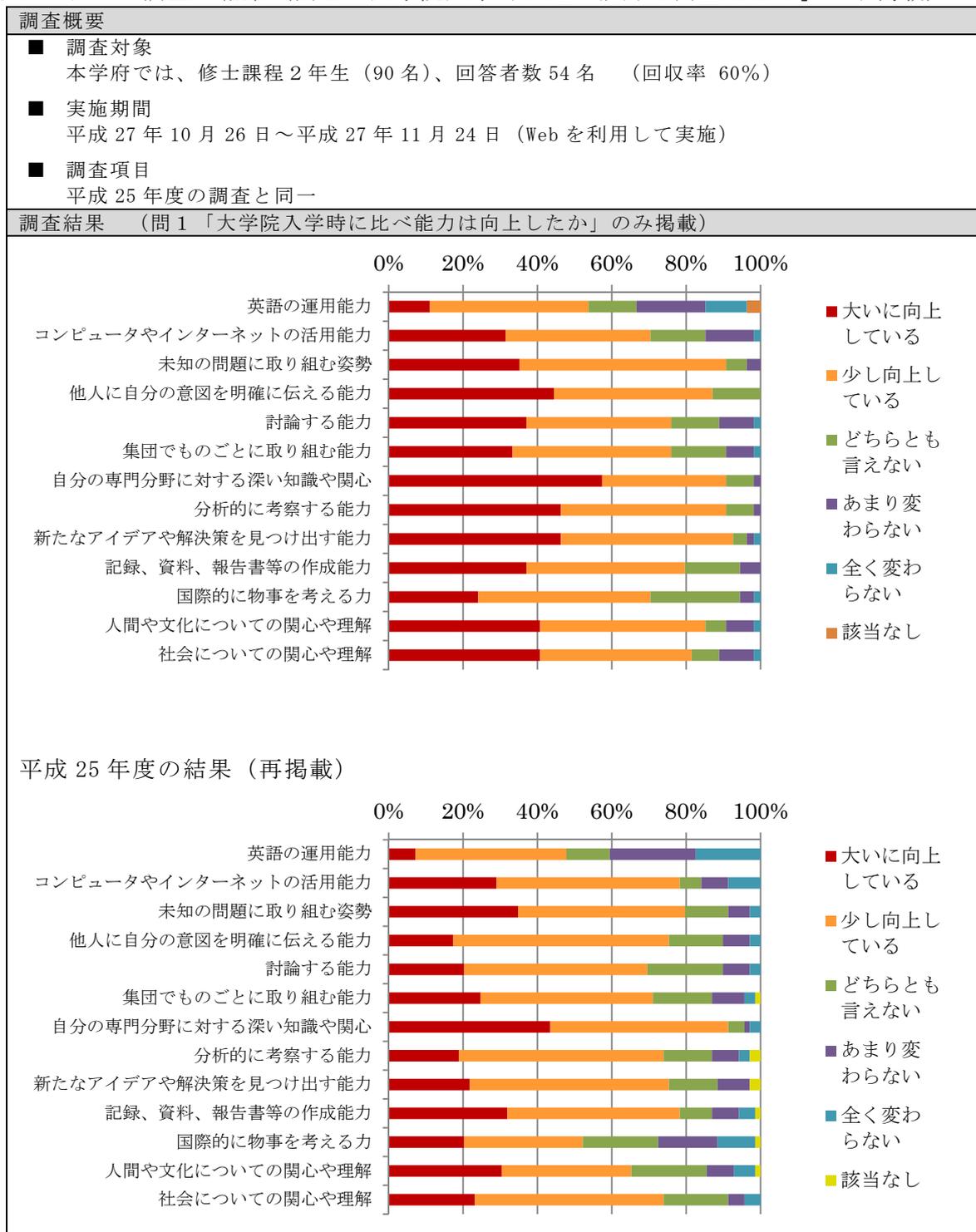
問 2 「大学院における教育課程等について、あなたにとって学府の教育目的の達成度は」



問 3 「大学院における教育課程等について、あなたにとっての満足度は」



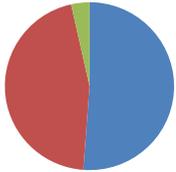
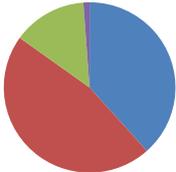
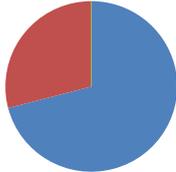
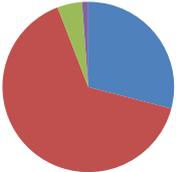
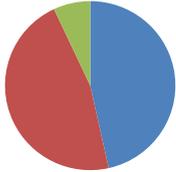
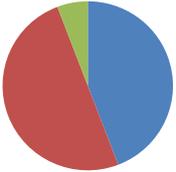
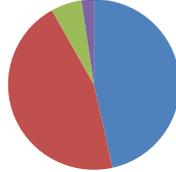
○資料 44 平成 27 年度実施の全学共通フォーマットによる学習の達成度・満足度に関するアンケート調査の結果（問 1 「大学院入学時に比べ能力は向上したか」のみ掲載）



## 2) 学府独自の学習の達成度・満足度に関するアンケート調査

本学府の教育目的に関連した学府独自の学生の達成度等に関するアンケート調査を行った（資料 45）。調査結果からは、社会や科学が抱える課題の把握、知の統合による課題解決、関連する他分野の知識の重要性の認識等において、85%以上の学生がある程度以上の達成と回答しており、自由回答でも本学府の教育方法やその成果に対して肯定的な意見がほとんどであった。以上より、本学府の「様々な学問分野の知の教授」「実践的教育」は十分に機能し、大きな成果を挙げていると判断される。

## ○資料 45 本学府独自のアンケート調査

調査概要	
■ 対象者	各専攻 M2、D3
	ユーザー感性学専攻 59名 (52名回収)
	オートモーティブサイエンス専攻 29名 (22名回収)
	ライブラリーサイエンス専攻 14名 (12名回収)
	合計 102名 (86名回収、回収率 84%)
■ 実施期間	平成 27 年 11 月 24 日～平成 27 年 12 月 4 日
調査結果 (選択質問)	
<p>(1) PTL、インターンシップ、研究等で、現代社会や科学が抱える複合的かつ根源的な課題の把握に取り組みましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 取り組んだ</li> <li>■ ある程度取り組んだ</li> <li>■ 取り組んでいない</li> </ul>	<p>(2) 現代社会や科学が抱える課題の広がりや全体像を俯瞰できるようになりましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ そうなった</li> <li>■ ある程度そうなった</li> <li>■ なっていない</li> <li>■ 無回答</li> </ul>
<p>(3) 自身の専門とは異なる関連する分野の知識 (学習) の重要性を認識しましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 認識した</li> <li>■ ある程度認識した</li> <li>■ 認識していない</li> </ul>	<p>(4) 自身の専門とは異なる関連する分野の知識を獲得できましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ できた</li> <li>■ ある程度できた</li> <li>■ できていない</li> <li>■ 無回答</li> </ul>
<p>(5) PTL、インターンシップ、研究等で、複数の学問分野の知見を統合して課題解決に取り組みましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 取り組めた</li> <li>■ ある程度取り組めた</li> <li>■ ほとんど取り組めていない</li> </ul>	<p>(6) 知の統合を通して、社会において将来役に立つと思う知識を、獲得することができましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ できた</li> <li>■ ある程度できた</li> <li>■ できていない</li> </ul>
<p>(7) 将来の進路や生き方を決めていくうえで、大切な視点やヒントをつかむことができましたか。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>■ できた</li> <li>■ ある程度できた</li> <li>■ できていない</li> <li>■ 無回答</li> </ul>	
調査結果 (自由回答の回答例)	
設問：統合新領域での学習や研究等の成果、経験等について自由に記述してください。	

- インターンシップで、実践の場を体験することにより、自分の課題解決に取り組むことができた。また、それを研究に繋げることが出来たので、大きな学びの成果を獲得することができた。
- 多領域に渡る分野の知識や調査法等を身につけることができた。企業への提案が授業内であることや、教授との距離が近く、親身になって相談にのってくださることがとても助かった。
- 自分の専門外の事柄についても、PTLを通じて「活きた体験」として見識を深めることが出来た。社会に出て、様々な仕事に取り組むとき、大きな力になっていくと思います。
- 自分の専門以外の研究などに触れることで新たな視点を得ることができた。
- 長期インターンシップや副専攻システムなど独自の教育カリキュラムは本学府の強みであり、それを通じて自分の専門以外の知識を得ることができた。これにより物事をより多角的にとらえることができるようになったと思う。
- 充実した研究をすることができました。この学府だからこそ学ぶ事ができたことも多々あります。
- 図書館サービスや司書養成を研究テーマとして、3年間研究に取り組むつもりが、仕事と両立は難しく、成果が出なかった。研究テーマについては、たとえばデータの収集、結果の分析などで指導教授の専門領域や、ライブラリーサイエンスの多様なテーマに関わる研究発表を見聞きし、統合的な考察ができたと思う。また自分のテーマにおける観点が広がり、テーマを具体化する上で役に立ったと考えます。遠隔地であることと仕事があるため、大学院の他の授業がほとんど履修できなかったこともとても残念です。オンラインコースの開設などを希望します。

## 2-1-(2)-② 分析のまとめ

在学生に対するアンケート調査結果は、達成度、満足度ともに高く、入学時の能力からの向上を自覚している割合も高い。特に、現場の課題の把握、知の統合による課題解決等の達成度等は非常に高く、「多様な学問分野の知の教授」「課題解決に取り組む実践的教育」といった本学府の教育も高く評価している。したがって、本学府における教育は大きな成果が上がっていると評価できる。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

在学中や修了時の状況 (2-1-(1)) について

単位修得率は高く、修得した科目も、多様な分野の科目に跨っており、学府の教育理念に則している。在学中の研究も各種取組が効果的に機能して進められており、意欲的に研究発表をし、国内外の会議等で受賞している。さらに、社会の課題解決を目指す課題で本大学の助成金を多数獲得し、また、社会や地域と連携した取組を幅広く行い、マスコミにも取り上げられている。

在学中や修了時の状況から判断される学業の成果を把握するための取組とその分析 (2-1-(2)) について

在学生に対するアンケート調査結果は、達成度、満足度ともに高く、入学時の能力からの向上を自覚している割合も高い。特に、現場の課題の把握、知の統合による課題解決等の達成度は非常に高く、本学府の教育を高く評価している。したがって、本学府の教育は大きな成果が上がっていると評価できる。

これらのことから、「科学や社会の複合的な課題を解決する人材の養成」という本学府の教育目的が達成されていると考えられ、前述の関係者の期待に応じていると判断される。

## 観点 2-2 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

## 2-2-(1) 進路・就職状況、その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況

## 2-2-(1)-① 就職の状況

修士課程修了者の就職希望者の就職決定率は90%前後であり、高い水準にある。博士課程修了者の就職希望者の就職決定率は、平成25年度は40%に落ちたが、26年度には100%と回復している(資料46)。

各専攻の修士課程修了者は、ディプロマ・ポリシーで示した人材像にふさわしい業種の組織に就職しており(資料47、48)、本学府の教育目的に沿った人材育成が果たしている。博士課程修了者の就職先は、大学や公的な研究機関ばかりでなく、民間企業も多く、産業界への高度専門人材の供給についても成果を上げつつある。

## ○資料46 就職希望者の就職率

(修士課程)

課程	データ種別	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
修士課程	就職者数	38	41	49	41	45
	就職希望者数	40	46	53	46	52
	就職率	95.0%	89.1%	92.5%	89.1%	86.5%
博士後期課程	就職者数		5	6	2	6
	就職希望者数		5	8	5	6
	就職率		100%	75%	40%	100%

出典：卒業修了生進路調査

## ○資料47 課程ごとの産業別就職状況(人)

課程	分類	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
修士課程	建設業		2	1		1
	製造業		24	20	21	23
	電気・ガス・熱供給・水道業		1	1		
	情報通信		3	7	5	5
	運輸業・郵便業				1	
	卸売業・小売業			5	4	3
	金融業・保険業		1	3		1
	不動産業・物品賃貸業			1	1	1
	学術研究・専門・技術サービス業			1	2	2
	宿泊業・飲食サービス業				1	
	生活関連サービス業、娯楽業		1			1
	教育、学習支援		4	2	3	3
	医療、福祉		2	1		
	複合サービス事業			3		2
	宗教・その他のサービス業			1		1
	国家公務・地方公務		1		3	2
その他		2	3		1	
博士後期課程	製造業			3	2	3
	電気・ガス・熱供給・水道業		1			

## 九州大学統合新領域学府 分析項目Ⅱ

卸売業・小売業		1	
学術研究、専門・技術サービス業	3	2	2
教育、学習支援			1
その他	1		

出典：学校基本調査 平成22年度～平成26年度

## ○資料 48 就職先（具体名）

課程	年度	企業名
修士課程	H22	M's Planet 一級建築士事務所（自営）、（株）マツダ、資生堂、花王株式会社、福岡市役所、熊本大学医学部附属病院、楽天株式会社、株式会社レベルファイブ、株式会社メディアンスデザイン、株式会社クリーク・アンド・リバー社、株式会社イー・イー・エス、株式会社ささく工房、東京建物株式会社、日立オートモティブシステムズ、日産自動車株式会社、川崎重工業、富士通テン株式会社、中国電力株式会社、中国建設銀行、三菱自動車工業、ローム、フリーランスライター、トヨタ自動車株式会社 他
	H23	SMBC 日興証券株式会社、（株）シータス&ゼネラルプレス、馬出小学校、野村総合研究所、茨城県県庁、特定非営利活動法人子ども NPO センター福岡、株式会社東海理化電機製作所、株式会社九電工、株式会社ポピンズ、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ、東京エレクトロン九州、本田技研工業株式会社、有限会社スタディオパラティソ、旭ファイバーグラス株式会社、日立オートモティブシステムズ株式会社、日産自動車株式会社、愛和外語学院、富士ゼロックス株式会社、園田電気管理事務所、和白丘中学校、古河電池株式会社、博報堂プロダクツ、住友化学株式会社、九州電力株式会社 他
	H24	SCSK 株式会社、JFE 株式会社、阪神内燃機工業株式会社、西日本旅客鉄道株式会社、華為技術有限公司、特定医療法人順和長尾病院、株式会社 JAL スカイ九州、株式会社 IMAGICATV、株式会社電通東日本、株式会社肥後銀行、株式会社琉球銀行、株式会社プラメイク、株式会社フェローズ、株式会社ニトリ、株式会社トヨタ車体研究所、株式会社ジー・サーチ、株式会社ジュピター・テレコム、東京エレクトロン九州株式会社、東レ株式会社、日立オートモティブシステムズ株式会社、日産自動車株式会社、日本共産党、新日鐵住金化学株式会社、岡三証券株式会社、富士通株式会社、大牟田市 他
	H25	AGC セラミックス株式会社、JAC Trading Group、TIS 株式会社、アイシン精機株式会社、イスゞ自動車（株）、コイズミ照明（株）、スズキ株式会社、ダイハツ九州株式会社、ダイハツ工業株式会社、トヨタ自動車（株）、トヨタ自動車九州株式会社、パナソニック株式会社エコソリューションズ社、ボッシュ株式会社、マツダ株式会社、一汽豊田技術開発有限公司、人と防災未来センター、佐賀県、北谷町、南箕輪村、国立大学法人九州大学、富士重工業株式会社、岡山放送、岩崎産業株式会社、日本貨物鉄道株式会社、日産自動車株式会社、日立ソリューションズ、日立ドキュメントソリューションズ、東急不動産株式会社、株式会社グランドビジョン、株式会社ジェイテクト、株式会社みづま、株式会社リコー、株式会社三越伊勢丹、株式会社個別指導塾スタンダード、西日本電信電話株式会社、豊田通商株式会社、長崎市役所 他
	H26	九州通信ネットワーク、シンク・ワン株式会社、日立製作所、高松市役所、（株）アピステ、日清食品、株式会社ディンプス、マキチエ株式会社、社会福祉法人横浜やまびこの里、滋慶学園グループ、西日本シティ銀行、中日本高速道路（株）、日本総合住生活株式会社、大分県庁、凸版印刷株式会社、タイ日産自動車株式会社（Nissan Motor Thailand Ltd、NMT）、トヨタ自動車株式会社、本田技研工業株式会社、マツダ株式会社、三菱自動車工業株式会社、日産自動車株式会社、パナソニックアドバンステクノロジ株式会社、株式会社デンソー、日本タンクステン（株）、日産化学工業株式会社、滋賀県 他
博士後期課程	H23	財団法人化学物質評価研究機構、九州大学学術研究員、TOTO 株式会社
	H24	（一財）化学物質評価研究機構、株式会社坂本電機製作所、日産化学工業株式会社、九州大学、中央自動車工業株式会社、パナソニック株式会社

H25	日産自動車株式会社、株式会社ブリヂストン、スタジオシロタニ
H26	マツダ株式会社、日立建機株式会社、株式会社東芝、日本学術振興会、九州大学

## 2-2-(1)-② その他の修了生の活動の状況

PTL での活動がきっかけとなり、ユーザー感性という視点から地域や社会に貢献する活動を展開する修了生を複数輩出している（資料 49）。彼らは、ユーザー感性学の学びを生かし、現場に密着しながら課題解決と社会貢献に当たっており、専攻の開設趣旨にそった教育効果である。

### ○資料 49 PTL が修了後の活動のきっかけとなった事例

	在学中の活動（業績）	修了後の活動（業績）
事例 1	<p>2009 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>後期：明治通りまちづくり協議会 PTL に参加</li> </ul> <p>2010 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>上記の授業で 10 分ランチフィットネスをプレゼン</li> <li>福岡市と協働事業で 10mlf を上記協議会参加企業で行い修士論文の調査研究を行った</li> <li>We. Love 天神まちづくり協議会でインターンシップ生として企業の健康づくりについてアンケート調査を行った</li> </ul>	<p>2011 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>福岡市協働事業に、勤労者の運動促進提案が運動実践者が少ない勤労者の運動推進事業として採択された</li> </ul> <p>2012 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「一般社団法人 10 分ランチフィットネス協会」を設立。代表理事となり現在に至る</li> <li>10 分ランチフィットネスの商標登録</li> </ul> <p>2015 年現在</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>10 分ランチフィットネス参加者、8000 人以上を達成した</li> </ul>
事例 2	<p>2010 年年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもホスピス PTL に参加。えんがわプロジェクト（現ケアコミュニティハウス事業の原型）をプレゼン</li> <li>重い病気や障がいのある子どものための子どもホスピスに関するヨーロッパの現状及び日本の現状について前期後期各 1 回フォーラムを開催</li> </ul> <p>2011 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>キャナルシティ・マーケティング PTL 参加</li> <li>医療的ケアの濃厚な人との共同発表（アートミーツケア学会）</li> <li>医療的ケアの濃厚な計 2 名を対象に修士論文の調査研究</li> <li>フォーラム「一線を越える展」を指導教員及び医療機関と連携して開催（WAM 医療福祉機構助成）</li> </ul>	<p>2012 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>NPO 法人化申請 代表理事就任 NPO 法人取得「NPO 法人ニコちゃんの会」法人設立</li> </ul> <p>2013 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>福岡市共働事業「おうちで暮らそうプロジェクト～障がい児・者と家族の在宅移行・在宅生活充実を目指して～」で、福岡市における医療ニーズの高い人に関わる実態調査・医療型短期入所拡充の模索・パーソナルブックの作成</li> </ul> <p>2014 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>福岡市共働事業継続実施：パーソナルブック及びその他の取組について他県からの問い合わせ及び視察。現在議会においてセカンドホーム他の事業について制度化へ向けて審議・予算要求。</li> <li>認定 NPO 法人取得</li> </ul> <p>2015 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本財団より共働事業で実施していたセカンドホームプロジェクトについて支援を受けフォーラム開催</li> <li>身体的にバラエティあふれる人たちの演劇公演「BUNNA」を実施（損保ジャパン愛ちきゅう倶楽部の助成）</li> <li>ケアコミュニティハウスプロジェクトについて、みずほフィナンシャルグループより支援を受けワークショップ及びイベント開催予定</li> </ul>

## 2-2-(1)-③ 分析のまとめ

就職希望者の就職決定率は高く、また、各専攻が目指す教育目的に沿った職種や業種に人材を輩出できている。また、修了後、PTL がきっかけとなった活動を行う修了生も出てきている。したがって、上記の進路・就職状況等の状況から判断して、在学中の学業の成果が上がっていると評価できる。

## 2-2-(2) 在学中の学業の成果に関する修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果

## 2-2-(2)-① 卒業・修了生に対する意見聴取の結果

全学共通フォーマットによる修了生に対する意見聴取の結果は、資料 50 に示すとおりである。

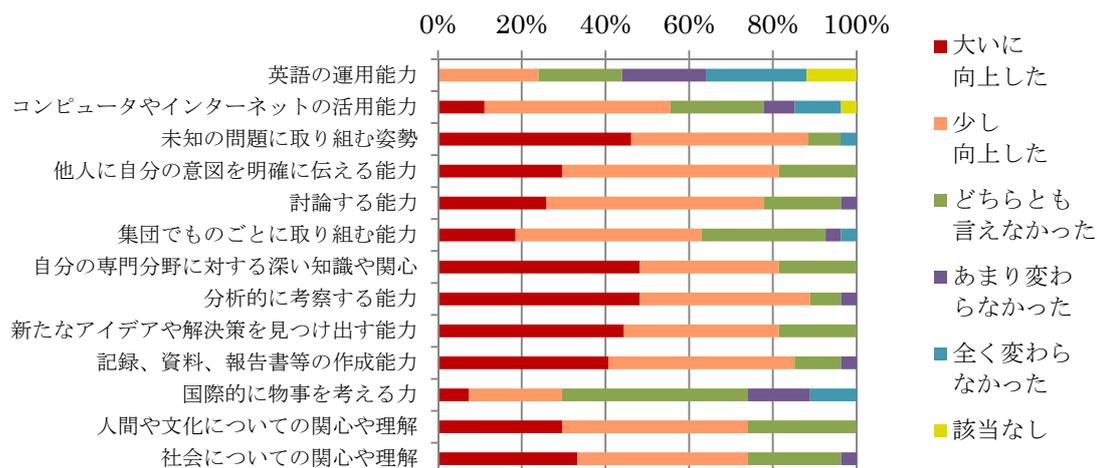
入学時に比べ能力が向上したかという問に対しては、ほとんどの項目で、大いに向上した、少し向上したと回答した割合は 80% 前後であり、学業の成果を示すものと言える。一方、英語の運用能力、及び、国際的に物事を考える力については、向上を自覚している者の割合は低い。このため、英語による研究発表を課す、国際会議での発表を推奨するなどの取組を行ってきた。27 年度に行った在学生に対するアンケートの結果(資料 44)では、どちらの能力も向上を自覚している者の割合は大幅に増加しており、効果は上がっているものと考えられる。

本学府の教育目的の達成度、本学府での学習に対する満足度、修得した学習成果の有用性については、いずれの項目も過半数が肯定的な回答であり、これらのことから、十分な学習環境・指導を提供できたと考えられる。特に、専門以外の幅広い教育により修得した学習成果を、約 50% がとても役に立つと回答しており、本学府の多様な学問分野の知の教授という教育が効果を挙げていることを示している。

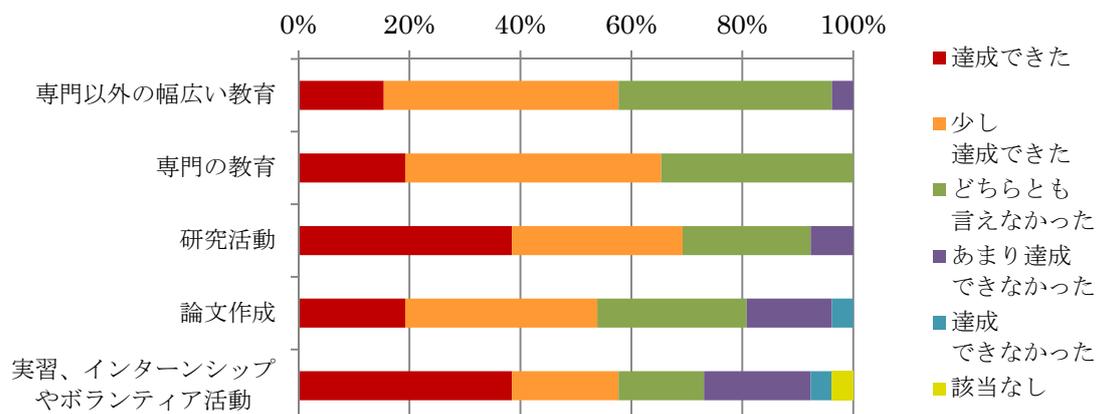
○資料 50 修了生についての意見聴取の結果(全学共通フォーマットによる Web アンケート調査)

調査概要	
■ 対象者	本学府での対象者は、ユーザー感性学専攻及びオートモーティブサイエンス専攻の修了者 215 名。29 名回答。(※ ライブラリーサイエンス専攻は、調査時点で、まだ 1 期生しか修了しておらず、修了生も数名であったため、修了生に対する意見聴取は行っていない。)
■ 方法	手紙で依頼、Web で回答。
■ 実施期間	H25 年 8 月 27 日～同年 9 月 17 日。修了生 215 名に手紙で依頼、Web で回答。回答者数 29 名。
調査結果	

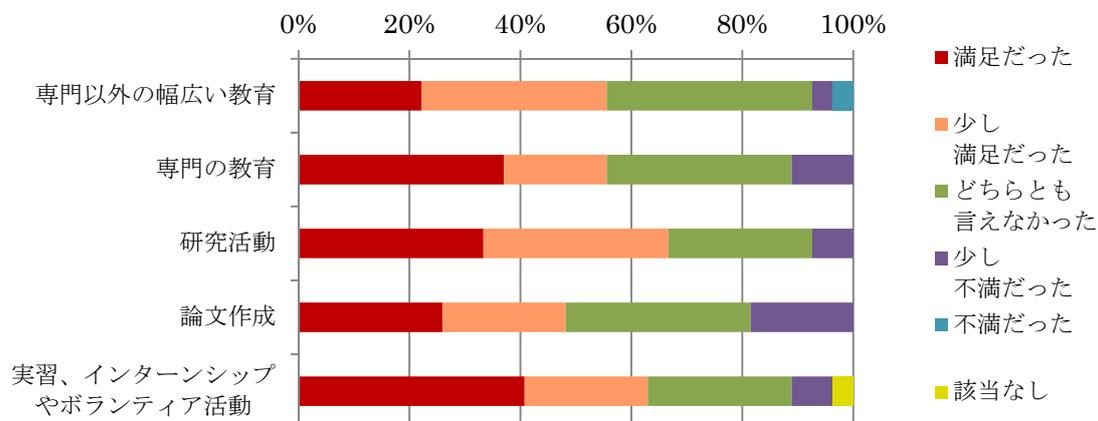
## 問1 「大学院入学時に比べ能力は向上したか」

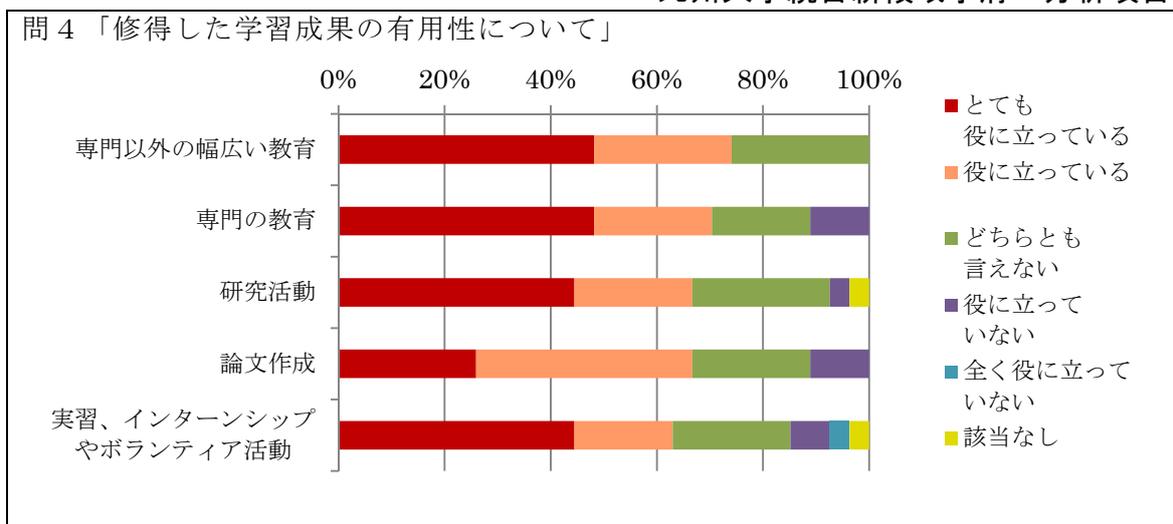


## 問2 「教育目的の達成について」



## 問3 「満足度について」





## 2-2-(2)-② 就職先・進学先等の関係者に対する意見聴取

### 1) 全学共通フォーマットによる就職先・進学先等の関係者への意見聴取

全学共通フォーマットによる就職先・進学先等の関係者へのアンケートは、大規模に行うことが困難であり、サンプル調査に留まっている。十分な統計ではないが、どの能力についても過半数が優れていると回答している（資料 51）。これから、本学府での教育・研究指導が効果を挙げていることが伺える。

○資料 51 就職先・進学先等の関係者への意見聴取結果(全学共通フォーマットによる Web アンケート調査)

就職先における現在の能力	大変優れている	優れている	どちらとも言えない	劣る	極めて劣る	該当なし
専門分野の知識がしっかり身につけている	0	2	1	0	0	1
幅広い教養・知識を身につけている	0	3	1	0	0	0
専門分野に関連する他領域の基礎知識が身につけている	1	2	1	0	0	0
知識や情報を集めて自分の考えを導き出す能力がある	2	1	1	0	0	0
チームを組んで特定の課題に適切に取り組む能力がある	1	2	1	0	0	0
ディベート、プレゼンテーション能力がある	1	2	1	0	0	0
国際コミュニケーション能力、異文化理解能力がある	0	3	1	0	0	0
積極的にリーダーシップがとれる	1	1	2	0	0	0
実務能力がある	1	2	1	0	0	0
期待通りの活躍をしている	1	2	0	0	0	1

### 2) 部局独自の関係者に対する意見聴取

修了生に対する評価ではないが、オートモーティブ学専攻のインターンシップ懇談会では、インターンとして受け入れた学生に対して、専門以外の知識を習得する能力、語学力、仕事に取り組む姿勢等について、非常に高い評価を得ている（資料 52）。

## ○資料 52 外部の関係者への意見聴取の結果

(オートモーティブサイエンス専攻)

インターンシップ懇談会を毎年開催し、インターンシ受入企業の担当者から意見・要望を聴取している。平成 27 年度（平成 28 年 2 月）に行われたインターンシップ懇談会では、学生に対して、以下のような意見を頂いている。

- 専門以外の知識（コンピュータプログラミング）を非常に短期間に身に付け、課題に対応する力があつた（当該学生の専門は先端材料科学）。
- シミュレーションに関する知識を短期間で勉強し、成果も出せた。
- 留学生を受け入れたが、非常に前向きで語学も堪能（日本語、英語、スペイン語）だった。
- 仕事を頼むとそのやり方を自分で考える力がある。分からないことは、自分から周りに質問に行ける姿勢もあり、こちらもやりやすかつた。
- 期待以上にやってくれたため、当初の計画から課題を倍近くに増やした。引き続きインターンを受け入れたい。
- 当部署で日頃やりたかつたができていなかったテーマについて、この機会にインターン生とともに集中的に取り組めた。当社にとっても学生にとっても Win-Win だったと思う。

## 2-2-(2)-③ 分析のまとめ

以上のように、在学中の学業の成果に関する修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果は、総合的に見て良好である。特に、修了生に対するアンケートで、専門以外の幅広い教育で習得した学習成果の有用性については、50%がとても役に立つと回答しており、本学府の教育の妥当性及びその成果を示している。

したがって、上記の分析結果を踏まえて、総合的に判断すると、学習成果が上がっていると評価できる。

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

進路・就職状況、その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況(2-2-(1))について

就職希望者の就職決定率は高く、また、各専攻が目指す教育目的に沿った職種や業種に人材を輩出できている。また、修了後、PTL がきっかけとなった活動を行う修了生も出てきている。

在学中の学業の成果に関する修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果(2-2-(2))について

総合的に見て良好であり、特に修了者の「専門以外の幅広い教育で習得した学習成果」を 50%がとても役に立つと回答しており、本学府の教育目的の妥当性及びその成果を示している。

以上の状況を踏まえて、総合的に判断すると、前述の教育目的等を基に本学府が設定した教育課程の編成と教育科目の配置（カリキュラム）による学習成果が上がっていると考えられることから、前述の想定する関係者の期待に応えていると判断される。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況  
該当なし

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況  
該当なし